嵐吹き荒れるのかもしれない物語

†ぷー†

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
嵐吹き荒れるのかもしれない物語

【Ｎコード】
Ｎ５４５４Ｒ

【作者名】
†ぷー†

【あらすじ】
彼は順調にテンプレート通りに進んでいき無事に転生をはたした。つまり　神のミス→主人公死す→能力ＧＥＴ→転生　ということなのですよ。

注：この作品は私の処女作です。なので分かりずらい所などがあると思いますが宜しくお願いします。

死亡のちチャンス（前書き）

はじめまして。
ぷーです。
思い立ったが吉日という事で書き始めました。
宜しくお願いします。

死亡のちチャンス

こんにちは。
私は茶神緑（さがみ　みどり）と申します。
男です。
高校3年生です。
趣味は読書で特技は速読です。
アニメや漫画も大好物です！！！

さて誰に対してしたのかも分からない自己紹介という名の現実逃避も終わったしもう一度状況を確認してみよう。
左：白い壁
右：白い壁
前：ビクビクしている中年オヤジ
後：白い壁
上：知らない天井（白い壁）
下：道路にグロテスクな状態で倒れている元俺の体

うん、ここまで来るともうテンプレだな。。。
まぁもうお気づきの通り俺死んじゃったみたい☆
それにしてもどうして死んだんだっけ？？？

『ビクッ』

んっ？何か中年オヤジが一瞬びくついたよな？

「おい、おっさん。あんた誰？」

「わっワシは神じゃ」

「えっ『髪』？？」

「いやっ『神』じゃ」

「ふーん・・・。んでその自称神様が何の用？？俺死んだんでしょ？」

「その痛い子をみる目はなにっ！？
まぁよい。君は確かにしんだぞい。」

「やっぱり。所でどうして死んだんですか？死んだ時の記憶があいまいで・・・」

「そっそれはのぉ・・・」

なんか言いにくそうだなぁ。
どしたんだろ？？

「交通事故に巻き込まれたんだけど、これワシのミスなんだ。
つまりは本当に申し訳ないんじゃが、ワシが殺しちゃったってこと・・・。てへっ☆」

「ふーん。そうなんすね。んでこれからどうなるの」

「反応薄っ！？君は怒らないのかい？」

いやだってねぇ～。別に未練もないしな。
両親もいないし、友達も少なかったし。
それに俺は常に全力で毎日悔いが残らないように生きてきたしね。
まぁあの『てへっ☆』には最高に殺意がわいたけれども。
思いだしたらムカついてきたな・・・

「死んだことに対しては別にかまわん。けどお前の『てへっ☆』については殺意すらわいたよ。」

「お前変ってるなぁ・・・。大抵の人間は理不尽に殺されたら怒るというのに。」

そんなもんなのかねぇ？

「まぁよい。ワシのミスで死なせてしまったと言う事実には変わりない。
だから転生のチャンスをお前に与えよう」

わぁお！やっぱりテンプレだ！笑
でも嬉しい限りだぜぃ！！
マンガの世界でもいいのかなぁ？？

「それって元の世界ですか？」

「どこでもいいぞ。どの世界に転生しようと赤子からになってしまうがな。」

「マンガの世界はあり？？？」

「ああ、よいぞ。」

「よっしゃあああああ！！」

「あっ後好きな能力もいくつか付けてやるぞ」

「マジか！？あなた様は神か！！！！！」

「最初から神だって言ってるじゃないか！？」

「そういやそうだったな。」

「忘れてたんだ・・・。まぁよい。それでどの世界に行くか決まったかい？」

フフフ・・・

愚問だな！俺は二次創作の小説を読みながらいつも思っていたことがあるんだ。

もし俺もマンガの世界に転生するチャンスが巡ってくるならあのマンガにするってな（ニヤリ

「あぁ決まっている。俺が行きたいのは『フェアリーテイル』の世界だ！！！」

死亡のちチャンス（後書き）

ん～やっぱり書くのは難しいですな・・・
でも頑張りますよ～！

能力のち転生

ｓｉｄｅ緑

「あぁ決まっている。俺が行きたいのは『フェアリーテイル』の世界だ！！！」

あぁ早くフェアリーテイルのキャラにあいてぇなー！

「ふむ、フェアリーテイルじゃな。よかろう。」

よっしゃー！

楽しくなってきたぜぃ。

「次に能力じゃがどうするかの？」

ん～能力かぁ。

まぁここはやっぱりバグキャラになりたいしなーｗ

「ジャンプ・マガジンで掲載された・されているマンガの技・道具を使えるようにしてください。あとそれらの知識も。」

ありきたりだな・・・

「なんてバグキャラじゃ・・・。」

ですよねーｗ

「まよい。チャクラや霊力などは魔力で代用できるようにしとくぞ。

」
「ありがとうございまーす」
もらえちゃったなw
「身体能力・魔力はフェアリーテイルの世界での平均にしとく。まぁ努力すればどんどん成長するようにするから鍛錬にはげみなさい。」
「了解だ」
「わしからはこれで終わりじゃが、何か聞きたいことはあるか？」
「どの時代に転生するだ？」
原作の時代じゃないと意味ないしな。
「どこがいい？きめていいぞ。」
「じゃあエルザと同じ年齢になるようにしてくれ。」
「ほいほーい。他にはないかな？」
「ああ、以上だ。」
「それじゃあ第2の人生楽しんできてくださーい」
この言葉と同時に俺は意識を手放した。

能力のち転生（後書き）

短いですね・・・。

修行のち旅立ち（前書き）

相変わらず短くて駄文ですが宜しくお願いします。

修行のち旅立ち

ｓｉｄｅ？

どうも前世で茶神緑だったものです。
それにしてもどこだここ？
ん？誰かに抱きかかえられているのか。
そーいや赤ちゃんからだっていってたなぁ・・・
それにしてもきれいな女の人だなぁ。母ちゃんか？
あっちにいるイケメン野郎は父ちゃんかな？
ちなみに名前はヴェルデ・フッドらしい。
まぁどうにかなるか！！

次の日
甘かった・・・
これは何て羞恥プレイなんだ！？
あれか？俺の精神力を鍛えるための修行か？？？
とにかく我慢だ俺！！！

一気に４年後（４歳）
早い？そんなの知ったこっちゃない。羞恥プレイという名の精神力強化の修行しかなかったよ。
んで今日から基礎体力をつけるために修行開始だよ！
と言っても筋トレと魔力の扱いについて練習するくらいだよ。
いくら能力があっても使う本人が弱いんじゃ意味ねーしな。

さらに1年後（5歳）
今俺はいろんなマンガの知識を使い修行をしている。
ＮＡＲＵＴＯの影分身の術で数人になり、２人１組になって、ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲの功防力移動の技術をを練習している。これが意外に難しい・・・
でも練習の甲斐あって大分魔力のコントロールはできるようになったぜ。
そして魔力量もそこそこ上がったからあるものも付けている。
あるものとは幽遊白書の呪霊錠だ。
初めて付けた時は死ぬかと思った・・・
今では結構慣れたからいいけど。

2年後（7歳）
この日も俺はいつも通り修行をしてへとへとになりながら家に帰りついた。

「ただいまー」

あれ？誰もいないのか？
いつもは両親が出迎えてくれるのに。
そんなことを考えていると隣の家のおばちゃんが慌てながらやってきた。

「ヴェル君やっと見つけた！！大変なの今から言う事落ち着いて聞いてね。」

どーしたんだろ？

「・・・はい。」

「実はヴェル君のお父さんとお母さんが・・・事故に巻き込まれて亡くなったの・・・」

「えっ・・・」

そんな・・・

こっちの世界でも両親を失うなんて・・・

「そうですか・・・すいません、しばらく一人にしてもらえますか」

「・・・わかったわ。」

そういっておばちゃんは出て行った。

そして俺はこの世界に来て初めて泣いた。

一晩中泣き続けた。

こんなに泣いたのは前世も合わせて初めてだった・・・

泣き終わってある決意をした。

もう泣かない！両親の分も幸せになる！両親の分も生きる！！！

そして俺は旅に出た。

列車のち船（前書き）

どーもー！
この話から原作入りです。
よろしくです。

列車のち船

ヴェルデが旅に出て１２年ほど経過した。
ヴェルデ１９歳で原作開始年だ。
そしてここはハルジオンの街へ向かう列車の中である。
そこには見覚えのある青年が眠っていた。
そうヴェルデである。

今更だが彼の髪は緑色で短髪である。
というか容姿はワンピースのロロノア・ゾロのまんまだ。
服装も新しい（２年後）ゾロの服装を真似て作ったものを来ているらしい。
ちなみに刀はさしていない。

彼は現在も旅を続けている。
前世同様毎日悔いが残らないように生きているらしい。

その時ヴェルデが目をさました。

ｓｉｄｅヴェル

「ふぁ～、よく寝たなー」

やっぱり列車での長旅は疲れるなー。

「っともうすぐハルジオンの街に到着だな。降りる準備をするか！」

そう言ってるうちに着いたみたいだな。

よし、降りるか！

その時前の方から声が聞こえてきた。

「あ・・あの・・お客様・・・・・」

「だ・・大丈夫ですか？」

あっあれは！？

ナツではないのか？？

「あい。いつもの事なので」

そしてあの青い猫はハッピーでは！？

こんな所で出会えるとは。

「はぁはぁ・・・無理！！もう二度と列車には乗らん・・・・」

本当に乗り物に弱いんだな・・・

よしっちょっと話してみよ。

「おい、大丈夫か？」

「だ・・誰だ・・・おま・・・おまえ・・・」

「相当辛そうだな」

「あい、ナツは乗り物に弱いんだよ」

「そーなのか。お前らはここで降りるのか？」

「あい」

「じゃあ急がないと列車が出てしまうな。手伝ってやるから降りるぞ！」

「そうだね！ありがとー」

なんとか降りられたのはいいが、本当に大丈夫かナツは・・・

「大丈夫か？」

「あい！すぐに元気になると思うよ。」

「そうか、ならいいが。それじゃ俺はこれで！」

「ありがとねー」

「おう、またな！」

多分すぐに会いそうだしな。

さてと、とりあえずすることもないし観光しながらぶらぶらすっか。とか考えてたらまたもや前から声が聞こえてきた。

「あたしの色気は１０００Ｊかーーーーっ！！！」

何かめっちゃキレながら看板蹴ってるし。恐っ！？

近くにいたじーちゃんがビックリしてるよ！

てかあれって原作キャラの一人ルーシィじゃまいか！！！
星霊見せてほしいなあ。
ん？なんかいつも間にか向こうに人だまりができてるな？
なんだっけ？

「この街に有名な魔道士様がきてるんですって」

「火竜（サラマンダー）様よー」

あぁそんなのあったなぁ！
てかルーシィもフラフラ～と近づいていってるし・・・
おっ何かナツがいる。
しかも「イグニール！イグニール！」とか言いながら集団に突撃してってるし。
その後がっかりして出てきたと思ったら女性たちにボコられてるしw
そして今俺の横に飛んできたし。

「人違いだったね」

「大丈夫か？」

「あい！あっさっきの人だ。」

「いてて、大丈夫だ。お前がさっき列車降りるの手伝ってくれたのか。ありがとな！」

「いいってことよ！」

「それにしても、なんだあいつ？」

ナツがサラマンダーを見ながら呟いたら後ろから声がした。

「本当いけすかないわよね。さっきはありがとね！」

「？」

とある飲食店

「あんふぁいいひほがな（あんたいい人だな）」

「うんうん」

「俺までよかったのか？」

「えっえぇ・・・大丈夫ですよ」

「そうか、ありがとな」

「そっそれより、ナツとハッピーだっけ？ゆっくり食べなって」

その後もなんやかんや話してたが、ここは原作通りさっきの男が魅了（チャーム）って魔法を使っていたらしい。

別にここは原作介入しなくてもいいんだが、やっぱり魔法で人の心を操るのは見逃せないよな。

「そんじゃあ俺はこれで失礼するよ。ルーシィありがとな！」
「あっいえ。どういたしまして。私もそろそろいくけど、ゆっくりたべなよね。」

そう言ってルーシィはお金を置いていた。
やっぱりこの娘基本いい子だな。
てか思ったんだがどうして俺に対してだけ敬語なんだ？
やっぱりゾロの顔って基本恐いのかな？
あんまり表情を崩さない俺も悪いかもしれんが・・・
なんか悲しくなってきた（涙

「ぐもっ。ごちそう様でしたー！！！」
「でしたー！！！」

そしてこの2人は面白いなｗｗ
なんか泣きながらお礼行ってるし。
一緒にいたら飽きることがなさそうだな。

さてそろそろ店を出るかな。

「じゃあまたなぁ！」
「あっはい。さよーならー。ナツ、ハッピー私も行くね。バイバイ！」
「あぁまたなヴェルデにルーシィ！」

「じゃーねー」

さて夜まで待つかね。

そして夜の船上

俺は今変化の術で女性になって船に潜入している。
そしてボスであろう男がいる部屋を探している。
以外にこの船広いから見つからん・・・

その時ある一室から声が聞こえてきた。
この声ルーシィーか？
あぁそーいや原作でルーシィって捕まってたっけ？

「とりあえず助けに入るか。」

そう呟き俺は部屋と扉を蹴破って中に入った。

ｓｉｄｅルーシィ

私は今男たちに抑えつけられいる。
フェアリーテイルに入れてくれるって言うから着いてきたのに。
こんなやつがフェアリーテイルの魔道士だなんて！？
悔しい・・・
そして恐い・・・

お願い誰か助けて！！！！

そう思った瞬間入口の扉が壊されて人が入ってきた。

「やっと見つけた」

そう呟いた女の人は綺麗な緑のロングヘアーで薄緑のドレスを身にまとっている。

誰だか分からないけど綺麗な人だった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅヴェルデ

「やっと見つけた」

そうやっとボスを見つけたので。

ルーシィも原作通り捕まってるみたい。

「誰だてめぇ」

「誰でしょねぇ？（ニコ」

「まぁいいお前も中々上玉だなぁ。ここにいるってことは調教が必要なわけだな」

「サラマンダーさん2人まとめて調教っすね（ニヤニヤ」

「あぁそうだ（ニヤニヤ」

こいつら気持ち悪っ！？
ここで俺が男だってバラしたら面白そうだな。
「あぁ？お前らの客には変な趣味のやつがいるんだな？俺なんかを商品にしようとするなんて・・・」
「何言ってんだお前？」
「いやぁだって俺男だし。」
『ボンッ』
そう言った瞬間変化を解いて元にもどった。
「なっ！？」
「えっヴェッヴェルデさん！？」
みんな驚いているなぁw
「よっルーシィ！こんな所で会うとは思わなかったよ。」
「えっえっ？？？」
まだ混乱してるし。。。
「何もんだてめぇ」
「お前らに教える義理はない。」

「ちっ！まーいいお前らやってしまえ」
部下どもがわらわらとやってくる。
「ヴェルデさん危ない！？逃げて！！」
「大丈夫だ。さっきは言い忘れてたが、俺も魔道士だ！」
「！？」
うーんなんで行こうかな？
修行の成果を見せるときだしな！！
と言っても人数多いしめんどくさい・・・
「よしっあれでいくか！」
そう言った瞬間手には1本の刀が握られていた。
「刀1本でこの人数を相手できるのか？」
「余裕だ。ある強者が言った言葉だがウサギを狩るのに全力を出すのは馬鹿なケモノだと。
俺もウサギ程度に全力などださん。ただこの人数はめんどくさいから俺の実力の一片を見せてやる。」
「ぶっ殺してやる！？」
「散れ千本桜」
そう言うと刀身部分が消えていき周りには桜の花弁のようなものが

まっていた。
そう、ＢＬＥＡＣＨの朽木白哉がもつ斬魄刀だ。
「なっなんだ！？」
「どうなってやがる！？」
などとざわつき始めたが、桜の花弁に斬り刻まれて力尽きていった。
「いっ一瞬で・・・」
「すごい・・・」
「安心しな、殺してはいない。」
「くそっ貴様何者だ」
「ただの通りすがりでルーシィの知り合いだ。」
「俺の計画を邪魔しやがって・・・」
「計画ねぇそんなの知らん！」
「きっ貴様～！」
サラマンダーが攻撃しようとしたら突如天井が崩れて人が降ってきた。
「なっ昼間のガキかっ！」

「ナツっ！」

「どうやってきたんだ天井から？」

「おぷ・・駄目だやっぱ無理」

「えーーーーっ！？かっこわるーー！！！」

来ていきなり酔うなよナツ！！

何か対策考えてくりゃーいいものを・・・

「あっヴェルデとルーシィだぁ。こんな所でなにやってるの？」

「気分だ」

「騙されたのよ！フェアリーテイルに入れてくれるって・・・」

よし後はナツにまかせよー！

んで結局原作通り進んでいって港が半壊状態に・・・

ナツぅこれはやり過ぎだろ（汗

まあ面白かったしいいかな。

よしやっぱり俺もフェアリーテイルに入れてもらおう！！

そうと決まればナツに・・・

あれあいつら俺置いて逃げていったし！？

って俺の方にも軍隊がきたーーーー。

「クソー俺は悪くねぇーーーーー！！！！
ナツのやつ次会ったら覚えとけよ！！！！！」

列車のち船（後書き）

どーも。作者です。

「ウサギを狩るのに～」はワンピースの鷹の目の言葉のことです。
ちょくちょく多作の好きなフレーズなどを使います。

ではまた。

大きい爺さんのち小さい爺さん（前書き）

ほぼ原作通り進んでおります。

大きい爺さんのち小さい爺さん

「くそーナツめ・・・よくも俺を置いていったな！」

つーかなんで俺まで追いかけられるんだよ！？

速効で撒いてやったがな。

んで今俺はフェアリーテイルの建物の前にいる。

ナツに文句を言うためだ。（もうすぐナツが着くのは確認済みだ）

そしてついでにフェアリーテイルに入るつもり。。。

「ん？やっときたか」

前からナツ、ルーシィ、ハッピーが歩いてきた。

「わあ・・・おっきいねー」

「ようこそフェアリーテイルへ」

「お帰り諸君」

「「「！？」」」

「ヴェルデなんでここいるんだ！？」

「いやー何かさハルジオンって街の港でさぁ誰かが暴れたみたいでさ偶々いた俺が軍隊に追われちゃってねーあの場にいたナツやルー

シィなら誰がやったのか知ってるかと思ってねぇ（ニヤリ」

「わっ私はわからないかなあ～（汗」

「ルーシィよなんでそんなにビクビクしてるんだい？俺はこんなに素晴らしい笑顔できいているのに。」

「「「（目が笑ってねぇ（ませんよ～））」」」

「まぁルーシィはいいや。被害者だしね」

「ホッ」

「さぁナツくんどうして私を置き去りにしたのかなぁ？」

「おっお前あの場にいたのか？」

「そーいやお前暴れだす前は酔ってて気づいてなかったな・・・」

「まぁいいや条件次第で許してやる。俺をフェアリーテイルに入れろ」

「いいんじゃないか？なぁハッピー」

「あい！ヴェルデはいい人だし強いみたいだから大丈夫だと思うよ！」

「じゃあ決定～！宜しくな」

「おう」

うんなんとか入れたぜ！
これでますます楽しくなってきたーーー！！
とかわくわくしてたらルーシィが話しかけてきた。

「あっあのーヴェルデさん」

「んなんだ？それと俺のことはヴェルでいいぞ！ナツとハッピーもな。」

「「おう（あい）」」

「はい、わかりました。それでこないだ言い逃したんですけど船上では助けてくれてありがとうございました。」

「あ～別にいいよ。俺はルーシィを助けたってより人の心を操る魔法を使うあいつが気に入らなかったからやっただけだけらな。」

「それでもお礼を言わせてください。ありがとうございました。」

「そうかい。じゃあ受け取っとくよ。どういたしまして。。」

「よしじゃあギルドに入ろうぜ！」

俺がそう言うとナツが勢いよく入って行った。

「ただいまーーー！！！」

「ナツ、ハッピーおかえりなさい」

「ナツまたはでにやらかしたなぁ。ハルジオンの港の件新聞に載っ
『バギャーん』　うごっ！？」

「てめーサラマンダーの情報ウソじゃねか！」

「あらナツが帰ってくるとお店が壊れそうね。うふふ」

「壊れてるよーーー！！！」

ドカッ

バキッ

ゴス

ドカーン

ピューン

ゴン

うんなんつうか想像以上に騒がしいギルドだな・・・
てかグレイってホントに脱ぎ癖があるんだ。
そしてエルフマン弱っ！？

「あらぁ？新入りさん？」

「！！！ミラジェーン！キャー本物～」

ルーシィが壊れたよw

「ああ、今日からここで世話になる。俺はヴェルデだ。こいつは『ルーシィです！』」

「そう2人とも宜しくね。」

「「ああ（はい）」」

「ア・・・アレ止めなくていいんですか？」

「いつものことだからぁ。放っておけばいいのよ」

「あらららら・・・」

いつもこんなだったら家具とか修理費用がすごそうだな（汗

つーかミラさん血を流しながら笑顔で楽しいでしょ？っとか言わないで恐いから・・・

「魔法！！！」

「これはちょっとまずいわねぇ」

いつの間にか喧嘩がヒートアップして魔法を使おうとしてるし。

これは止めた方がいいかな？

「やめんかバカタレ！！！」
おお俺が止める前に止めたやつがいたよ！
つーか・・・
「「でかっ！！！」」
なんじゃこのでかいのは！？巨人族か！！！
って確かマスターマカロフやなかったっけ？？
「あら・・・いたんですかマスター？」
「マスター！？」
やっぱりそうか。
「ちっ」
「フン」
「だーはっはっはっは！！！みんなしてビビりやがってこの勝負俺の勝ぴ・・・」
あっ途中で踏みつぶされたｗｗ
「む、新入りかね？」
「はっはい」
「あーそうだ」

「ふんぬうぅぅぅ」

なんだその掛け声ｗｗｗ

「マスターさん早く元の大きさに戻ってくれよ。ルーシィがビビり過ぎて死にそうだｗｗ」

「今やっとるわ！」

おぉいっきに小さくなった。

「えぇぇー」

「よろしくネ」

軽いなｗ

このあとはマスターがフェアリーテイルの魔道士なら自分の信じた道を進め！的なことを演説してたよ。

まぁ原作通りだけどいい事を言うねぇ！

俺もそう思うしね。自分の信じた道を歩めないやつには先なんてあるはずがない。

それに俺は悔いが残らないように生きていっている。

そのためには自分の信じた道を進むことは必要不可欠だからな。

やっぱこのギルドに入って正解だったぜ！！！

凶悪のちエロ（前書き）

こんばんは。

感想書いてくださった方ありがとうございます。
アドバイスや応援がとてもうれしいです！！！
これからも頑張るんで宜しくお願いします！！！！

凶悪のちエロ

「さっ寒っ！？」

今いる場所は夏季にも関わらず雪が吹き荒れる山中だ。
全員夏服のままできたから当然寒い。
現にルーシィはナツから毛布を奪い時計っぽい奴の中に入って行った。
あれが星霊か～、初めて見たな。

「おぉ」

「時計だ～！」

「へぇそれが星霊魔法か～」

「「私ここにいる」と申しております。」

「なにしに来たんだよ・・・」

「確かにな・・・」

そもそも何故こんな所まで来たかと言うといろいろと理由があるんだ。
さっきマスターが演説した後、飯とか食べて依頼でも行こうかな～って思ってたら、小さい子供がマスターの所に来てた。
なんでも父ちゃん（マカオ）が依頼をしに行って帰ってこないらしい。
それを聞いていたナツが、助けに行こうとしていた所を俺とルーシ

ィがついて行ったわけ。
まぁ俺も子供には父ちゃんが絶対に必要なので助けたい、と思い動いたんだけどね。
とまぁこんな感じで山に来たって訳よ！

「「て言うかナツとヴェルはそんな薄着で寒くないの～？」と申しております。」

「ああ」

「俺はちょっと裏技使ってるからね～」

「「裏技？」と申しております。」

「そっ！凍る火柱（アイスファイア）っていうので体温を調節してる。」

分かる人もいると思うが、これはめだかボックスの黒神くじらが身に付けた過負荷（マイナス）である。
その詳細は自身の体温を操る能力で、自身の体温を下げ空気中の水蒸気を凍らせることで氷を作り出したり、体温を上げて炎を生み出したりすることが出来る。
なので今回は体温を上げて防寒用に使用している。

ちなみに俺がもらった能力（ジャンプ・マガジンに載っているマンガの技・道具の使用）だが、体質的な能力（例えば悪魔の実や異常・過負荷など）は切り替えることが可能だ。
そして、これらを使うには魔力が必要になる。
大きい能力ほど魔力が多く必要なのだ。
例えば悪魔の実でも、超人（パラミシア）系より自然（ロギア）系

の能力を使う方が、魔力消費が多くなる。
だから常にロギア系の能力をＯＮにしてて、不意打ちとかを防ぐって事はできない。
大量の魔力を消費しててざって時に「もうあんまり魔力ありませーん」ってなったら不意打ちよけてもその後やられて意味ないしね・・・。

閑話休題

「なんだそれ？そんなの初めて聞いたぞ。」

「あい。」

「「私も初めて。」と申しております。」

「まぁこりゃあ魔力は使うが、魔法とはちょっと違うしな。」

「「「？」」」

「まぁ俺固有の才能ってとこだな。」

あくまで過負荷は才能だしな。

「ふーん。」

「また今度詳しく聞かせてやるよ。それよりナツ、気になったんだがマカオってやつは、どんな依頼を受けにこんな山奥まで来たんだ

？」

正直原作知識も薄れててあんまり覚えてないんだよね（汗

「「あっそれ私も気になってた！」と申しております。」

「はぁ？お前ら、知らねーで着いてきたのか？凶悪モンスター”バルカン”の討伐だ！」

「！！！」

「ほぅ、凶悪モンスターか。」

「「私帰りたい」と申しております。」

「はい、どうぞと申しております。」

「あい」

「マカオーーー！！！いるかーー！！！」

「ナツ、そんなやみくもに探しても見つからんだろ・・・」

「じゃあどうやって探すんだよ？」

「俺に任せろ」

ここはＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲの円を使うか。

「円」

そう言って、オーラの代わりに魔力を自分を中心に徐々に広げていく。
円は、内部にあるものの位置や形状を肌で感じ取ることができる。

「見つけた！！」

「本当か！？」

「マカオか分からんが、あの崖の上にいる。てかこっちに向かってきてるな。」

と言った瞬間いきなり崖の上から猿が落ちてきた。
というか攻撃してきた！

「バルカンだー！」

「ウホッ」

バルカンはナツを跳び越えルーシィの所へ行った。

「人間の女だ！」

そういうとバルカンはルーシィをホロロギウムごと担ぎ、逃走して行った。

「うほほほほ～～～！！」

俺とナツは一瞬呆気にとられていた。
それは・・・

「「あいつしゃべれんのか！」」

猿がしゃべったことにだ。

しかも凶悪モンスターじゃなく、エロ猿だったし！

「「てか助けなさいよぉぉぉ！！！」・・・と申されております。」

凶悪のちエロ（後書き）

ちょっと疲れたんで、２部に分けます。

そしてやっぱり書くのは難しいですね（汗）

猿のち親父（前書き）

温かくなったり、寒くなったり分からない天候ですね・・・

猿のち親父

「「てか助けなさいよぉぉぉ！！！」・・・と申されております。」

あぁどんどんルーシィの声が遠ざかって行く・・・

って早く追いかけないと！？

「ナツ、ハッピー行くぞ！」

「「おお（あい）」

そう言い俺たちは、エロ猿を追いかけて行った。

それにしてもナツ足速いな～。

俺も素の状態でも、結構速い自信あったんだけどな。

どんどん離されていくし・・・

うん、これは帰ったら修行だな！

だって悔しいし。

おっと考えているうちに追いついたみたいだな。

「開け！金牛宮の扉、タウロス！！！！」

「ＭＯ（モオ）ーーーー！！！！」

おぉ何か牛出てきた！！

ここは猿に牛に動物園ですか～？？

「ルーシィ大丈夫か？・・・ん？そーいやナツは？」

「あっヴェル！私は大丈夫だけど、ナツが・・・崖から落とされて・・・」

「崖からね～。ハッピーがここにいないのを見ると、助けに行ってるんだろうし、大丈夫だろ！」

「そういえば・・・」

「ルーシィ、この牛も星霊か？」

「そーだよー」

「ちなみにさっきから、ずーーーっとルーシィの胸元を凝視してるんだけど・・・。」

そう、目をハートにして「MOたまりませんなぁ」とか言ってるし。

「あ～忘れてた・・・こいつもエロかったんだ・・・」

「そっか・・・頑張れ！」

「ウホッ、オデの女とるな！」

「エロ猿が・・・」

「俺の女？それはMO聞き捨てなりませんなぁ」

「そうよ、タウロス！あいつをやっちゃって！！」
「「オレの女」ではなく、「オレの乳」と言ってもらいたい！！」
「もらいたくないわよ！！！」
この牛は真顔で何を言ってんだよ！！！
あー、もうめんどくさいから、さっさと終わらそ。
「ルーシィ、もうめんどいから倒しちゃっていい？」
「でっできるなら、いいんじゃないかな・・・」
「そっか！じゃあ遠慮なく。剃！」
そう言って一瞬にしてエロ猿の懐まで移動する。
「えっ・・・」
おそらくルーシィには、瞬間移動したようにしか見えないだろう。
「獣厳（ジュゴン）」
そしてエロ猿は吹き飛んで、崖にぶつかり気絶した。
ちなみに獣厳は、ワンピースに出てくる、ＣＰ９のフクロウが使う六式の応用技の一つだ。
これは指銃（しがん）の速度で打ち抜く超重量パンチだ。
まぁ俺の場合フクロウ程でかくないから、威力は半減されてるがな。
「終わったぞ。ルー・・・シィ？」

後ろを振り返り、ルーシィを見たら口をパクパクしながら固まっていた。
面白いな（笑

「よ～く～も、落としてくれたな～」

「あっナツ、ハッピーお帰り～」

「あい！あれ？ヴェル～バルカンは？」

「あっちで寝てるよ。」

「なに！？もしかして、もう終わったのか！？」

「うん！めんどくさいから瞬殺した！！」

「めんどくさいって・・・」

「ん？なんだエロ猿の様子がおかしくないか？」

なんか光りだしたし！
まさか進化でもするのか！？
とか思ってたら、怪我をしたおっさんになった。

「！？」

「猿がマカオになったー」

「えっ！？この人がマカオさんなの！！」

あっ、いつの間にかルーシィが元に戻ってる。
「エロ猿に接収（テイクオーバー）されてたんだな。」
「接収（テイクオーバー）？」
「体を乗っ取る魔法だよ。」
って、やばい！マカオが風に流されて崖から落ちそうだし！
「ナツ、待て！俺が行く。」
飛び降りそうになってたナツを止めながら俺も飛び降りる。
そして、なんとかマカオに追いつけた。
後は、
「月歩」
そう月歩で空を蹴って上昇していく。
「ふ～、危なかった。」
結構疲れたけど、無事にナツたちの元まで戻ってきた。
「今、空飛んでたよな？何て魔法なんだ？」
「いや、あれ魔法じゃないし。」
「？じゃあどうやったんだ？」

「説明してもいいが、マカオが危険な状態っぽいから後でな。」

「そーだった!?マカオは!?」

「相当傷が深い。このままじゃやばいぞ。」

「そんな・・・」

「マカオ、くたばんじゃねぇぞ!!ロメオがまってるんだ!!!」

「くそっ・・・情けねぇ・・・ハァハァ・・・19匹目までは・・・倒したんだが・・・」

「わかった!もうしゃべんな!!!」

「20匹目に・・・ハァ接収（テイクオーバー）されちまった・・・ハァ・・ハァ」

「じゅっ19匹もいたの・・・」

そんなにいたのか・・・

俺はバグキャラだから余裕だが、普通のやつが19匹は凄い。

やっぱフェアリーテイルの魔道士はすげぇな。

しかし、これ相当やべぇな。

いくら止血しても、このままなら助からないな・・・

ここはあれしかないかなぁ。

「しょうがないか。貴重だからあんまり使いたくなかったんだが・・・」

そう言いながら、懐から袋を取り出す。

「なんだ、それ？」

「これは仙豆って言ってな、怪我を治す薬みたいなもんだ。」

袋の中にあった豆を出して、見せながら説明する。

「はぁ・・・本当にこんなんで治るのか？」

「まぁ、騙されたと思って食わせろ」

「あぁ。ほら、マカオこれ食ってみろ！」

ナツがマカオの口に仙豆を入れて食べさせる。

「！？なっなんだこれ！！治った、傷が治ったぞ、ナツ！！！」

「！？マジか！！！マカオ、もう悪い所はないのか？」

「あぁ、驚いたことに完全回復してる・・・」

ちなみになぜ能力で道具をだせるのに貴重かと言うと、道具を出すときの条件のせいなのだ。

以前能力を使うには、魔力が必要になると説明したのは覚えているだろうか？

これは道具の引き出しにも当てはまるのだ。

つまり恩恵が大きい道具程魔力を使うのだ。

そして仙豆なのだがこれは、体力・魔力さらには全ての怪我まで治

してくれる。
こんなものが魔力を大量に使わないはずがない。
修行の成果で今の保有魔力量は相当多いのだが、それでも7割程消費しないと出すことができない。
なので基本的には、1日1粒しかつくれない。
そして毎日作るはずもなく、5粒程しか現在はもっていない。
なので重要な時にしか使いたくなかったのだ。
まぁ今回がその重要な時なのは間違いないがな。

閑話休題

「うっし、じゃあ俺に聞きたいこともあるだろうが、とりあえず山を降りるか！ロメオが待ってるぜ。」

「あぁ、申し訳ねぇ・・・。初対面のやつにでっけぇ借りができちまった。」

「ふっ、気にするなって！」

こうして俺たちは山を降りていった。
そしてギルドに戻る途中にロメオがいた。

「父ちゃん、ゴメン・・・オレ」

今回の件はロメオが他の子供に、父ちゃんがただの酔っ払いだと言われ、悔しくて「凄い仕事」をしてほしいと訴え、マカオが今回の依頼を受けたのだ。

「心配かけたな。スマネェ」

「いいんだ、俺は魔道士の息子だから。」

「今度くそガキ共に絡まれたら言ってやれ。・・・お前の親父は怪物１９匹、倒せんのか！？ってよ。」

うんうん、マカオっていい父ちゃんだな～。

さっ俺らは帰りますか～。

「ナツ兄～、ハッピー、ありがとーー！」

「「おー（あい）」」

「それからと、ルーシィ姉とヴェル兄もありがとーー！！」

俺は振り向かずに、右手を軽くあげてギルドへと向かった。

猿のち親父（後書き）

あれ～？

タウロスとナツの活躍を奪っちゃった・・・（笑

食事のち説明（前書き）

今回は、ちょっと休憩な感じですのぉ。

食事のち説明

マカオ救出から1日、俺はギルドのカウンター席で飯を食べていた。

「それにしてもよく食べるね、ヴェル」

「昨夜疲れてて、飯食わずに寝ちまったからな・・・」

ミラに聞かれて、そう答える。

昨日はマジで帰り着くや否やベッドに倒れこみましたよ。

「そーなんだぁ」

「ヴェル、隣いいか？」

ミラと話していると、マカオが訪ねてきた。

「ああ、いいぜ」

「ありがとさん。ヴェル、改めて昨日の件はありがとな！」

「別にかまわんよ。俺が好きでやっただけだし。」

「それでもだ。ロミオも感謝してたしな。本当にありがと！」

「そっか。それなら、どーいたしました。」

「それでヴェル、いくつか聞いてもいいか？」

「ん？いいぞ。」

「さっきルーシィから聞いたんだけど、お前がバルカンを倒したときと、俺を助けた時に使った魔法って何なんだ？瞬間移動したり、空飛んだりしたみたいだし・・・。」

「へぇ～、ヴェルって瞬間移動とか空飛んだりできるんだ～。」

「ま～できんことまないがな。でも俺、あのエロ猿倒したときは、魔法使ってないぞ。」

「は？魔法じゃないなら、一体何なんだよ！！」

「ただの体術だ」

「いやいやいや、体術で瞬間移動したり、空飛んだりできんだろ・・・」

「それができるんだな～。瞬間移動したのは『剃』って移動する技だ。これは移動する際に、地面を瞬時に１０回以上蹴って、爆発的な加速を得るんだ。だからめちゃくちゃ速く動いただけだ。」

「瞬間移動に見える速さって、どう考えても異常だろ・・・」

「すごいわねぇ～。」

「んで、空を飛んでたのは『月歩』って技。これは爆発的な脚力で空を蹴って浮く技だ。」

「空を蹴るって・・・。信じらんねぇ・・・・・

「確かに考えられないわねぇ～」

「むっ、信じてねぇな！見てろ！『月歩』」

そう言うと俺は飛び上がり、空を蹴る。

「うっ浮いてる！？」

「！？すごーい！本当に蹴ってるぅ！！」

「どうだー！！」

マカオは驚きすぎて唖然としている。
ミラは一瞬驚いたが、すぐに目をキラキラとさせながら見ている。
そしてギルドにいた、他の奴らも空を蹴り浮いている行為に驚いている。

「これで信じただろ！」

「あっああ・・・」

「ヴェルは、体術がすごいんだ～！！なんか魔法も凄いの使いそうだねぇ。」

「魔法ねぇ、また機会があったら教えてやるよ。」

「楽しみにしてるわね！！」

「ああ！」

「とっとりあえず、お前が規格外なのがわかったわ。。。」

「褒め言葉としてもらっとくわ。」

「ああ、そうしてくれ。それじゃあ俺は帰るわ！何かあったら、いつでも言ってくれ！お前には、でっけぇ借りがあるからな。」

「ふっ、そうさせてもらうよ。」

「じゃあ、またな。」

そう言ってギルドを出て行った。

「という事で、ミラ、おかわり！！！」

「何がという事かが、全く分かんないけど、まだ食べるんだ。」

「おう」

「はい、どうぞ。」

「サンキュー！」

そして俺は、皿の上の料理と財布の中身を減らしていくのであった・・・

食事のち説明（後書き）

ほぼ説明だけで終わった・・・

今日は忙しくて書く時間がなかったのよん（言い訳ゴメンチャイ）

２０万のち２００万、所により本好き（前書き）

今回はレビィちゃんが登場だす！

２０万のち２００万、所により本好き

「何か、いい仕事ないかな～」

俺は今リクエストボードの前で、依頼を探している。

うん、こないだ飯を食べすぎたせいで、金欠なんだ・・・

「あれ？あなたが、こないだギルドに入った、あのヴェルデくん？」

「ん？そーだが？」

後ろから声をかけられ、振り向いてみたら何かちっこい女の子と、2人の男がいた。

「私は、レビィよ。そしてこの2人がジェットとドロイ。よろしくね！」

「俺はジェットだ！よしく！」

「んで、俺がドロイ。よろしくな！」

「ああ、よろしくな！改めてだが、俺はヴェルデだ。ヴェルってよんでくれ。ちなみに、”あの”ヴェルデとはなんだ？」

「ん？ヴェルのこと、凄い噂になってるよ～。空を蹴る男やら、体術が凄いやつってねぇ。」

「あ～、そうなんだ・・・。まぁいいや。ちなみに、レビィたちも依頼受けに来たのか？」

「ああ、そのつもりだ。」

「あ～！！」

「どっどうした、レビィ！？」

「迷ってた、依頼がなくなってる～・・・」

「あの依頼か！」

「どうしたんだ？」

「実はね、今まで迷ってた依頼があったんだけど・・・その依頼ってのがね、エルバー公爵って人の家から、本を一冊盗ってくることなの。それだけなのに報酬が、２０万Ｊらしいの。」

「にっ２０万！？」

なんだその報酬！

本一冊で２０万Ｊって・・・

「あ～、その依頼ならナツがルーシィ誘って行くって言ってたわよ！」

「迷ってたのになぁ～」

「それで２０万なら迷うわな・・・」

「レビィ、行かなくて良かったかもしれんぞい。」
近くにいたミラが、誰が依頼を教えてくれた。
先に取られたことにレビィが落ち込んでいると、マスターが話しかけてきた。
「どういう事ですか？マスター？」
「その仕事、ちと面倒なことになってきた・・・たった今依頼主から連絡があってのぉ」
「キャンセルですか？」
「『報酬を２００万Ｊにつり上げる。』、だそうじゃ。」
ざわっ・・・
「１０倍！？」
「本一冊で２００万だとー」
「討伐系の仕事並みじゃねーかよ。」
ギルド内が騒然とする。
当たり前だ。ただでさ、この依頼は本一冊に２０万と言う異常な報酬だ。
それが１０倍の２００万なのだ。
「確かに、行かなくてよかったかもなレビィ」

そう、確かにおいしい仕事だが、絶対に何か裏がある。
おそらくじーさんの言う通り、めんどうな仕事になるだろう。

「そーかもね・・・」

「さてと、俺は適当に依頼でもして家探しでもするかね。」

「えっ、まだ決まってなかったの??」

「お金なかったしね・・・。それにできれば収納スペースが多い部屋がいいんだが、なかなか見つからなくてね。」

「ん?荷物がそんなにあるの?」

「んにゃ、俺の場合今はないんだが、後から本が大量に増えていってしまうんだ・・・。」

「本好きなの!!」

「まぁな。本ってのは、ジャンルを問わず、自分が知らない考え方や、発見があって面白いからな!」

「そーだよねぇ!!私も本大好きなの。今度ヴェルが読んで、面白いと思ったの教えてよ!私のお勧めも教えてあげるからさー」

「おぉいいぞ!楽しみだな。そーいや、ルーシィも確か本好きだったはずだが。」

「ルーシィって、ヴェルと一緒にギルドに入った女の子だよね?じ

ゃあ、その子も誘おうか！！」

「そーだな。あいつ喜ぶぞ。」

「じゃあ、決定ね！！家が決まったら教えてね。」

「おう、じゃあ俺はこれで。仕事にいってくるわ！」

「うん、いってらっしゃーい」

そうして、レビィたちに見送られながら仕事をしに行った。

ちなみに、後ろから「「ガーーン！！れっレビィとあんなにも、楽しそうに・・・（ブツブツ」」などと聞こえてきたのは、気のせいだろう・・・

２０万のち２００万、所により本好き（後書き）

うん、ドロイとジェットが空気だね・・・

カニのちエビ（前書き）

遅くなりました。

カニのちエビ

「でねぇー、ルーシーのカニが実はエビだったんだよー！！」

「ほうほう、何のことかさっぱりだよ、ハッピー。」

ハッピーが興奮気味に話すが意味が分からん・・・

今、ハッピーがこないだ行った仕事（本一冊破棄で２００万Ｊの依頼）について、話してくれてる途中だ。

なんでも、ルーシィがメイドコスプレをして、メイドの面接受けに行ったんだけど、即不採用だったらしい。

エルバー公爵の美的センスがすごいみたい・・・

結局屋敷に忍び込んだけどすぐにばれて、傭兵ギルドのやつとナツが戦って勝ったんだと。

そして、エルバー公爵とルーシィが相対したときに、ルーシィが出した星霊の話でハッピーが興奮して、訳が分からなくなった。

「ハッピー、あんたよっぽど『キャンサー』のことに驚いたのね・・・」

「あい。」

「ん？キャンサーって誰だ？」

「私の星霊だよ。巨蟹宮のキャンサーっていうの。」

「その星霊、カニなのに言葉の語尾にエビってつけるんだよー。まさに、ストレートかと思ったら、フックをもらった驚きだったよ。」

「確かにそれは、面白いな。（笑」

「まぁ私も最初は、驚いたけどね。」

星霊も個性豊かなんだな。

「あれ？そう言えばマスターは？」

「ん？そう言えばいないな。」

ルーシィに言われ見渡してみるが、確かにマスターの姿がなかった。

「あー、マスターなら今、定例会に行ってるわよ。」

俺たちが疑問に思っていると、ミラが教えてくれた。

「定例会？」

「地方のギルドマスターたちが集って、定期報告をする会よ。評議会とは違うんけど・・・う～ん・・・ちょっとわかりずらいかな？」

その後、リーダス（ギルドのメンバー）から光筆（ひかりペン）を借り、空中に図を書きながら魔法界の組織について説明してくれた。

「知らなかったなー、ギルド同士のつながりがあったなんて。」

「俺もだ。」

「ギルド同士の連携は大切なのよ。これをお粗末にしてると・・・ね」

「「？」」

「黒い奴等が来るぞォォォ」

「ひいいいい！！」

「おっわ！！」

「うひゃひゃひゃ！「ひいいい」だってよ。なーにビビってんだよ。ビビりルーシィ、略してビリィー！！」

「変な略称つけんな！」

「いやいやいや、ナツよ。後ろから気配を消して、急にこられたらびっくりするっての！なぁビリィー！」

「そーよ！脅かさないでよねぇ！！・・・ってヴェルまでビリィー言わないでー！！！」

「ははっ。すまん、すまん！ところで黒い奴等ってなんだ？」

「うん、黒い奴等ってのは連盟に属さないギルド、つまり闇ギルドのことよ。」

「あー、闇ギルドのことか。」

「なんか、こわそうだねぇ」

などと話しているうちに、いつの間にやらナツとグレイが、喧嘩をしていた。

「相変わらず、仲悪いわねー」

「そーでもないかもよ。喧嘩するほど仲がいい、とも言うし。」

「そーだといいんだけどね。」

んで、いきなりロキが、ルーシィを口説きだしたよ。

「ルーシィ、君って本当に綺麗だよね。サングラス越しに見ても、その美しさだ。肉眼で見たらきっと、眼が潰れちゃうな・・・はは っ。」

「潰せば」

ルーシィが冷ややかな目で見てるよ。

確かに引くけどね・・・

「うおおっ!!き・・君、星霊魔道士!?」

「?」

「なっなんたる運命のいたずらだ・・・!!!ごめん、僕たちここまでにしよう!!」

「何か始まっていたのかしら・・・」

ロキって、いろいろと面白い奴だな。
今度会ったら、話してみようかな。
とか次会うのを楽しみにしてたら、なんか戻ってきた。

「ナツ、グレイまずいぞ！！！」

「「あ？」」

「エルザが帰ってきた！！！」

「「あ”っ！？」」

ギルドにいるほとんどのやつが、冷や汗を流しながら驚いていた。
そして、入口には大きな角をもち、鎧を身に纏った女性がたっていた。

カニのちエビ（後書き）

魔法界の組織の説明は割愛しちゃいました・・・
詳しくは原作を読んでください。

風紀委員のち最強チーム（前書き）

おはようございます。
こんにちは。
こんばんは。

進みが遅いくて、申し訳ないです。

「今戻った。マスターはおられるか？」

「お帰り！！マスターは定例会よ。」

「そうか・・・」

バカでかい角を、持って現れた、この鎧を纏った女性は、エルザだ。エルザが帰ってきたことで、ギルドないがざわざわしている。

「エ・・・エルザさん。そ・・・そのバカでかいのなんですかい？」

とあるギルド員が訪ねる。

「ん？これか。討伐した魔物の角に、地元の者が飾りをほどこしてくれてな。綺麗だったので、ここえの土産にしようと思ってな。・・・迷惑か？」

「いっいえ！滅相もない！！！」

「討伐した魔物の角か・・・」

「すげっ・・・」

「ところで、お前たち。また問題ばかり、起こしているらしいな。マスターが許しても、私は許さんぞ！」

ルーシィとヴェルデは、誰こいつ？みたいな顔をしている。
その他は、ミラを除き焦った様子だ。

「カナ・・・なんという格好で、飲んでいる。」

「うっ・・・」

「ビジター、踊りなら外でやれ。ワカバ、吸殻が落ちているぞ。ナブ、相変わらずリクエストボードの前を、ウロウロしているのか？仕事をしろ。まったく・・・世話がやけるな。今日のところは、何も言わずにいてやろう。」

既に、いろいろ言っている気がするが、それを突っ込めるつわものはいないようだ。

「ところで、ナツとグレイはいるか？」

「あい」

エルザが訪ね、ハッピーが案内した。
しかし、その先には・・・

「や・・やあ、エルザ・・・。オ・・オレたち、今日も仲良し・・良く・・・や・・・やってるぜぃ」

「あい」

「ナツがハッピーみたいに、なっちゃったー！！！！」

そう、肩を組んで詰まりながら話すグレイと、ハッピーのしゃべり

方になったナツがいた。
何でもミラが言うには、2人ともエルザが恐いらしい。
ナツは昔、喧嘩を挑みボコボコにされ、グレイは裸でいる所を見つかり、ボコボコにされたらしい。
ちなみに、ロキはエルザを口説こうとして、半殺しにあったそうだ。
口説いただけで半殺しなんて・・・
哀れなロキである。

「実は、2人に頼みたいことがある。」
エルザが、ナツとグレイに向かい言う。
「仕事先で、少々厄介なことを耳にしてしまった。本来なら、マスターの判断を仰ぐところなんだが、早期解決が望ましいと、私は判断した。2人の力を貸してほしい。ついて来てくれるな。」

「え!?」
「はい!?」
「ど・・どういうこと!?」
「こんなデケー怪物、倒す女だぞ!!」
ギルドないがざわめく。
当たり前だ。
エルザはS級魔道士なのだ。
なので大抵の依頼は、1人でこなしている。
今まで、エルザが人を誘って、依頼をしているのは見たことがない

のだ。
それだけで、何か大事だとわかる。
「出発は明日だ。準備をしておけ。」
「あっいや・・ちょっ・・・」
「行くなんて、いったかよ！」
「詳しくは、移動中に話す。」
そう言ってエルザは、ギルドを出て行った。
「エルザとナツとグレイ・・・。今まで、想像もしたことがなかったけど、これってフェアリーテイル最強のチームかも！！！」
と、ミラが言う。
ナツとグレイも、なんだかんだ言いながら、ギルドを出て行った。
「確かに、あの3人が組めば素敵だけど、仲がギクシャクしてるとこが不安なのよねぇ～。ルーシィついていって、仲をとりもってくれる？」
「えぇぇっー」
「心配すんな、ルーシィ。俺も一緒に行ってやるよ！」
「本当、ヴェル！！」
「ああ、エルザってやつの実力も見てみたいしな。ありゃあ中々強

そうだし。」

「ありがとー、ヴェルーーー！」

「それじゃあ、ルーシィとヴェルお願いね。」

「「はい。（了解した）」」

こうして、最強チーム（ミラ談）に星霊魔道士のルーシィと、バグキャラのヴェルデが加わった。
これはもう、本当に最強チームでは？とギルドでしばらくの間、話題になるのであった。

出発のち忘れ物（前書き）

戦闘を最近書いてないよーな・・・
多分次話くらいから入ります！

たぶん・・・

出発のち忘れ物

「なんで、エルザみてーなバケンモンが、俺たちの力を借りてーんだよ！」

「知らねーよ。つーか、助けならオレ1人で十分なんだよ！」

「じゃあお前1人でいけよ！！俺は行きたくねー！！！！」

「じゃあ来んなよ！！後でエルザに殺されちまえ！！！！」

俺とルーシィが来たら、ナツとグレイが早速ケンカをしていた。

「はぁ、いきなりかよ・・・・」

「だねぇ・・・・。どーするヴェル？」

「そーだな・・・・。よし、あれで、おとなしくさせるか。ルーシィ、ちょいと待ってて」

そう言って俺は、2人近づいていって、ある能力を使った。

「ネガティブホロー」

その瞬間、半透明の物体が出てきて、ナツとグレイの体を通過していった。

そう、これは悪魔の実であるホロホロの実の能力である。

生み出した霊体に触れられると、ネガティブ思考になるのだ。

「みなさんと・・同じ空気をすって、ごめんなさい・・・」

「俺なんて、”ドラゴン”スレイヤーだけど、所詮”トカゲ”以下の存在だ・・・」

ズドーン、という効果音が聞こえてきそうなくらい、ネガティブになるナツとグレイ。

「えっ・・ちょっ、これどうしたの！？」

「2人をネガティブにしただけだ。」

「ネガティブにしたって・・・」

「オイラ、こんな2人見るの初めてだよ。」

「まあ、すぐに戻るよ。」

「本当にヴェルって、不思議な魔法とか体術つかうね。」

「あい、いつもビックリです。」

「あはは、まだまだあるぞぉ！まーそれらは、おいおい見せやるよ。」

「うん。あっエルザさんがきたみたい！」

「ちょうど、あいつらも戻ったみたいだな。」

「「ヴェル、今のは何だよ！！！」」

「説明してやってもいいが、エルザが来たぞ。」

「「！？」」

「今日も、仲良くいってみよー！！」

「あいさー」

ナツとグレイは、エルザと聞いたら、すぐさま肩を組み仲良しだとアピールする。
こいつら、本当は仲いいんじゃないか（笑

「すまない・・・待たせたか？」

「「荷物多っ！？」」

俺とルーシィは、エルザの荷物の多さに驚いた。
いや、マジで多いし。
もう、引っ越しでもするんですか？ってぐらい多いし・・・

「ん？君たちは・・・昨日フェアリーテイルにいたな・・・」

「ああ、こないだ入ったばかりのヴェルデだ。ヴェルって呼んでくれ。んで、こいつも俺と一緒に入ったルーシィだ。ミラに頼まれて、俺たちも同行することになった。よろしく頼む」

「私はエルザだ。よろしくな。・・・そうか、ギルドの連中が騒いでいた、青年と娘とは君たちのことか。」

「「？」」

「なんでもルーシィは、傭兵ゴリラを倒したとかなんとか・・・」

「それナツだし・・・それに、少し事実と違うし・・・」

「そしてヴェルは、奇妙な体術と魔法を使うとか・・・」

「奇妙とは失礼な・・・。」

「今回は、少々危険な橋を渡るかもしれん。しかしそれなら、平気そうだな。」

「危険！？」

「まっがんばるよ！」

「はは、期待してるぞ。」

その後、ナツがエルザに条件付きでなら付き合うといっていた。
その条件は、勝負をしろというものだ。
エルザはそれを快くふけて、ナツがめちゃくちゃ燃えだした。
ちなみにこの燃えるって例えじゃなくて、マジで顔面から火が出てて燃えていた。
いや、どんだけやる気が上がったんだよ・・・

「うっ・・・ハァ・・ハァ・・・」

「ったく、さっきまでのやる気はどこにいったのかねぇ」
「全くだな。なっさけねぇなー、ナツはよぉ。」
そう、いつものことだがナツは電車に乗ったとたんダウンしている・・・
相当きつそうだな。
「しょうがない、私の隣に来い、ナツ。」
「あい・・・」
ドンッ！？
「「「「！！！」」」」
エルザがナツを呼び、ナツが移動すると、エルザがナツのお腹を殴り気絶させた。
「少しは、楽になるだろう。」
そう言いながら、ナツの頭を自分の膝の上に置き、膝枕をしている。だが全員唖然としている。もちろん俺もだ。
「そっそういや私、F・T（今後フェアリーテイルをF・Tと書きます）でナツとヴェル以外の魔法を、見たことないかも。」
ルーシィが話題を変える。
ナイス判断だ！！グッジョブ、ルーシィ！

「エルザさんは、どんな魔法を使うんですか？」

「エルザでいい。」

「エルザの魔法はきれいだよ！」

「へぇ～」

「血がいっぱいでるんだよ。・・・相手の！」

「それって、キレイなの・・・」

などと、どんな魔法を使うのか話し、電車を降りながら、今回の仕事の本題にはいった。

なんでも、闇ギルドの鉄の森（アイゼンヴァルト）が相手らしい。

そいつらは、ララバイという詳細不明の魔法で何かを企んでるとのことだ。

それを阻止するために、今回ナツとグレイにお呼びがかかったのだ。

いかにエルザといえど闇ギルド１つを相手取るのは厳しいからだ。

「アイゼンヴァルトに乗り込むぞ！」

「面白そうだな。」

「久しぶりに暴れられそうだな。」

「来るんじゃなかったー」

「汁出すぎだって。」

上からエルザ、グレイ、俺、ルーシィ、ハッピーである。
ギルド1つ相手なら、結構暴れれそうだから楽しみだ。

「あれ？・・・ウソでしょ！ナツがいないんだけど！？」

「「「「・・・！？」」」」

そのナツは、未だに電車の中で1人乗り物酔いに苦しんでいた。

忍び寄ってくる影に気づかずに・・・・

出発のち忘れ物（後書き）

今回使用した技はこれだぁー。

原作名：ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ
能力名：ホロホロの実
種類　：悪魔の実
使用者：ペローナ
能力内容：
　霊体を自由に生み出すことができる。
（霊体に、触れた者をネガティブ思考にする）
自由に幽体離脱をすることができる。

ハエパンチのち影真似（前書き）

休みの日はついつい、寝過ごしてしまうね。

ハエパンチのち影真似

「はぁ・・はぁ・・・」

電車の中で1人の青年が、苦しんでいた。
まぁ言わなくても、誰か分かるよね。
そう、みんなに置いて行かれたナツである。
そのナツに、男が近づいてくる。

「お兄さん、ここ空いてる？」

「ふー、ふー・・・はぁ・・・」

「あらら、つらそうだねー。大丈夫？・・・！！」

男は、ナツの右肩にあるＦ・Ｔの紋章を見つけ、驚いた。

「妖精の尻尾（フェアリーテイル）・・・。正規ギルドかぁー」

「うらやましいなー」

実は、この男、鉄の森（アイゼンヴァルト）所属のカゲヤマという魔道士だった。

ｓｉｄｅヴェルデ

「何という事だ！！話に夢中になるあまり、ナツを列車に置いてきた！あいつは、乗り物に弱いというのに・・・。私の過失だ！とりあえず、私を殴ってくれ！！！！」

「まあまあ」

エルザが駅員に近づいていく。

「そういう訳だ、列車を止める！」

「ど・・どういう訳？（汗」

うん、駅員さんは悪くない。
誰だって、いきなりあんなこと言われたら、そうなるよ・・・

「ハッピー！」

「あいさー」

エルザがハッピーに、緊急停止信号のレバーを引くように言う。
そして、この命令をきくハッピー。

あっ引いちゃった。
・・・って、えぇーーー！1人のために、緊急停止させちゃだめでしょ！。
しかも、ハッピーよ。エルザが恐いからって、そんな簡単にその命令はきいちゃだめだよ・・・

「ナツを追うぞ。すまない、荷物を『ホテル　チリ』まで頼む。」

「誰・・・あんた・・・（汗」

いやいや、誰に頼んでんだよ・・・
はぁ、しょうがない。

「エルザ、ちょっと落ち着け。」

「むっ、私は落ち着いているぞ。」

「まー、確かにそれがエルザなのかな・・・。でも荷物ぐらい、自分でホテルに持っていけ。」

「そんなことをしている場合ではないだろ！今現在もナツが・・・くっ！！」

「はぁ、落ち着けって。俺がぱぱっと、迎えに行ってくるからさ！」

「しかし！！」

「まあ、任せとけ」

今回は、ドラゴンボールの瞬間移動を使うつもり。

俺は、人差し指と中指の2本を額につけて、ナツの気（魔力）を探しはじめた。

「何をしている？」

「ん～？今、ナツの魔力を探している。」

「なっ！？大分離れてるはずだができるのか！！！」

普通、魔力の探知なんて広範囲じゃできんわな。
でも俺は、魔力運用の修行をしてたら結構な範囲で探知できるようになってた。
これも能力のおかげかな？

「ん？・・・見つけた！！」

「本当か！？」

「ああ、んじゃちょっくら行ってくるわ！」

「「「「！？」」」」

そう言った瞬間、俺は姿を消し残ったのは、驚いた表情をするエルザたちだけだった。

俺がナツの元へ瞬間移動したら、ナツが知らない男を殴り飛ばしていた。

「ハエパンチ！！」

「てってめぇ」

ハエパンチってなんだよ・・・

「ナツ、何やってんだよ・・・」

「ぬぉっ！？ヴェル、何でここにいんだよ！？」

「いや、お前を迎えにな。」

「おお、そっか。って言うかよくも、俺を置いて行ったなーー！！！」

「まあまあ、落ち着けって。ところであいつ誰だ？」

「知らん！Ｆ・Ｔをバカにして、ケンカ売られた。」

「ふーん。」

『先ほどの緊急停車は、誤報によるものと確認できました。間もなく発射します。』

車内放送が流れ、電車が動き出す。

「マズ・・・。ヴェル、逃げるぞ！」

「あぁ」

「逃がすか！？鉄の森（アイゼンヴァルト）に手を出したんだ。ただで済むと思うなよ！！妖精（ハエ）がぁー！」

「！？鉄の森（アイゼンヴァルト）だと。ナツちょっと待ってくれ。」

「早くしろょ・・うぷっ」

「なんだ、俺たちにビビったか！！」

「いや～丁度よかったんだよな」

「？」

「俺たちも、今お前らを探してたんだよ！！大人しく捕まりな！」

「！？上等だ！返り討ちにしてやる。」

そう言った瞬間、奴の影が立体的な1本の腕になり、俺に襲いかかってきた。

「へぇ～、影の魔法ねぇ」

オレは殴りかかってくる影を、全て余裕で受け流す。

「ちっ、すばしっこいやつめ！これならどうだ。八つ影（オロチシ

ヤドウ）」

すると、今度は先ほど見たいに1本の腕ではなく、八岐大蛇のような影になり襲いかかってきた。
てか、こんな狭い場所でこんな技出されたら、面倒だな。

「もう逃げ場はない！それにこいつは、何処まで逃げても追いかけるぞ！」

「じゃあ、逃げないし、避けない。」

俺はそう言うと、拳に魔力を集めた。

「はっ、諦めたか。・・・！？」

そして、影を殴り1匹ずつ消していく。
今やってるのは、HUNTER×HUNTERで言う所の、硬（こう）に似ている。
まあこれは魔力コントロールの修行中に、できるようになった。
つーか、多分この世界の人にもできるはず。
まあ魔力コントロールが、相当上手くないとできない芸当だがな。
と思っているうちに後1匹になっていた。

「これで、ラスト！」

「っく！バカな・・・素手で全部、破壊しただと！？」

「次はこっちの番だ。影の使い方ってのを教えてやるよ。」

「何を・・・」

「影真似の術」

そう言った瞬間、俺の影が形を変えて相手に迫って行く。
相手は、その影に気づき自分に当たらないように避ける。
そう、自分に当たらないように避けただけだった。

「ふっ、影真似の術成功。」

「!?動けない!!どうなってるんだ。当たってないのに・・・。」

「ふっ、この技は相手の影に、自分の影をくっつけることにより、俺と同じ動きをさせるというものだ。だから、影にさえ当たればいいんだよ。」

「なっ!?」

「んじゃ、終わらすか。影首縛りの術」

すると、相手の体に影が巻きついて締め付けていく。

「ぐっ、なっ何だ!?くはっ!」

「とりあえず、眠りな。」

そこで俺は、術に力を入れて、相手を気絶させた。

「うっし、とりあえず終わったか。ナツ帰るぞ!・・・あーダウンしてるし。」

「うっぷ・・・。お・・終わった・・のか？」

「ああ。とりあえず、エルザたちの所に戻るか。ナツ、俺に触れとけ」

「ああ。・・・うっぷ・・・。はぁはぁ」

「よし、じゃあこいつも連れてっと。」

そう言って、ヴェルとナツ、そしてカゲヤマの姿が消えた。
ただし、カゲヤマがもっていた荷物・・・３つ目のドクロの笛を残して・・・。

ハエパンチのち影真似（後書き）

今回使用した技はこれだぁー。

原作名：ドラゴンボール
能力名：瞬間移動
種類　：移動技？よくわからん・・・
使用者：孫悟空（その他数名）
能力内容：
　知っている者の気を感じとり、瞬時にその場所まで移動する。

原作名：ＮＡＲＵＴＯ
能力名：影真似の術
種類　：忍術
使用者：奈良シカマル（奈良一族）
能力内容：
　自分の影を、自在に形を変えて相手の影にくっつけ、自分と同じ動きをさせる。

原作名：ＮＡＲＵＴＯ
能力名：影首縛りの術
種類　：忍術
使用者：奈良シカマル（奈良一族）
能力内容：
　影で相手の体に、直接負荷をかける術。

占拠のち戦闘

「ただいまー！」

そう言いながら、俺はエルザたちの前に現れた。
ちなみに、『ホテル　チリ』の一室に、全員集まっていた。

「「「「！？」」」」

「ヴェル、いきなり現れるから驚いたぞ。しかしナツ、無事でよかった！」

そう言いながらエルザは、ナツを胸元に抱き寄せる。
まあ、普通は嬉しいことだろうがエルザは鎧を身に纏っている。
つまり・・・

ガンッ

「痛っ！？」

となるわけで（汗

「どころで、ヴェル。どうやって、消えたり現れたりしたんだ？」

「ん？瞬間移動しただけ。」

「それって、こないだ言ってた体術とは違うの？」

「違うぞ～。こっちのは本当に、瞬間移動してるし。ん～テレポートみたいなもんかな。」

「相変わらず、すごいわねぇ・・・」

「ふむ、確かに面白い技を使うみたいだな。」

「まあ、この話は後にして、ナツを迎えに行ったら、面白い収穫があった。」

「ん？なんだ？というか、一緒に連れてきたそいつは誰だ？」

「こいつが収穫。鉄の森（アイゼンヴァルト）のやつだってよ。なので、気絶させて連れてきました。」

「！？それは、本当か！」

「ああ、らしいよ～。」

「でかしたぞ、ヴェル！！」

そう言って、抱き寄せようとする。
だが、俺は素早く避ける。
痛いのごめんだしねぇ～。

「むっ、何故避ける！」

「いや・・・、痛いのいやだし・・・。それより今は、こいつから情報ひきだした方がいいのでは？」

「あっああ、そうだな。」

「あっあのエルザを、簡単にあしらってるだと！？」

グレイよ、何をそんなに驚いた顔をして、俺を見ている？
何も凄いことは、してないはずなのにな。

「さて、とりあえず起こさんとな。」

「そーだな。おい、起きろ！」

ドンッ

「ぐはっ！？」

エルザが容赦なく、カゲヤマの腹を殴り、痛みで起こそうとする。

「うわ～、容赦ねぇなー（汗」

「ごほっごほっ！！どこだ・・ここは？」

「起きたか。貴様、鉄の森（アイゼンヴァルト）が何を企んでいるか、吐いてもらうぞ！」

「！！ふっ、いやだね。」

ボコッ

「がっ！？」

エルザが顔面を殴る。

「言わんと、死ぬまで殴るぞ。」

「ぐっ・・こ・・断る。」

「ほう、本当に死にたいらしい。」

そう言ってエルザは、カゲヤマの胸倉を掴み上げ、首筋に換装で出した剣を突き付ける。

ってエルザ、マジで容赦ねーな・・・

「これが最後だ。答えろ！」

ものすごい殺気を出しながら問う。

「ひっ・・わっ分かった・・・。言う・・・」

すげぇ、エルザ。

すんなり、吐かせたよ。

カゲヤマ曰く、ララバイとは呪歌と言い、集団呪殺魔法だそうだ。

こいつは、ララバイの封印を解いて電車で戻っていたそうだ。

つまり、あの時電車にはララバイがあったのだ。

俺としたことが、見落としてしまったらしいな。

そして、ララバイをクヌギ駅と言うところで使うらしいのだ。

何か他にも隠していそうだが、これ以上は知らないの一点張りだ。

時間もなくエルザも諦め、クヌギ駅に行こうとする。

「早く、クヌギ駅に行き、止めないとな。ヴェル、さっきの瞬間移

動で行けるか？」

「さっきのでは、無理だな。知っている奴がいないと移動できん。」

「そうか。しょうがない、急いで移動するぞ。」

「待て待て。さっきのでは、と言ったろ。」

「ん？どういうことだ。」

「別の方法で、瞬間移動する。こいつを使ってな。」

そう言って、宝石のようなものを取り出す。

「これは、ダークブリングっていう闇の魔石の１つで、ワープロードって言うんだ。」

そう、ＲＡＶＥで出てくるＤＢ（ダークブリング）の１つだ。
ＤＢは心さえ強く持てば、悪に取りつかれることはない。

「闇の魔石・・・。そんなもの、大丈夫なのか？」

「ああ、心が弱いものが使うと闇の魔力で、悪にとりつかれてしまうがな。俺は、精神面を中心に修行してたから、取り込まれるほど弱くないんで大丈夫だ。」

使うものの心が、強ければ結構言い道具なんだよな。
シュダも味方になっても、使ってたしね。

「そうか。じゃあ行くか。」

「ＯＫ！」

瞬間、その場にいた全員が消えた。

そして、クヌギ駅入り口の階段部分に姿を現した。

「すっすげぇ・・・。マジで瞬間移動しやがった。」

「これがあれば、もう乗り物に乗らなくていいじゃねぇか！！」

「驚いたな・・・」

「もう、ヴェルには驚き疲れたかな・・・」

「あい」

「あはは、褒め言葉と思っとくよ。・・・ってこの惨状はなんだ？」

俺たちが現れた、階段を見上げると多数の兵士たちが、怪我をして倒れていた。

「ひいいぃ！！」

「遅かったか・・・。軍の小隊が突入したみたいだが・・・。」

「ああ、相手は１つのギルドだ。つまり全員が魔道士。かなうはずもないな。」

「ホームはこっちだ！」

グレイがホームを教えてくれ、みんなそっちへ急ぐ。
「ちっ、やはりカゲヤマは捕まっていたか。ん、てめぇらＦＴか！」
「な・・なに。この数・・・（汗」
ホームには、大鎌を持つ男を中心に、４・５０人の男たちが集まっていた。
おそらく、大鎌を持った男が、エリゴールだろう。
「面倒な奴らに捕まりやがって・・・。まぁＦＴだろうと関係ねぇか。とにかく、待ってたぜぃ。」
「貴様が、エリゴールだな。貴様らの目的はなんだ。ララバイといい、駅の占拠といい何を企んでいる！！」
「さーて、なんでしょうねぇ。駅には何がある？」
「駅？」
「まだわかんねぇか？これだよ、これ」
そう言いながら、エリゴールは風の魔法で浮き、放送用のスピーカの所に行く。
「！？ララバイを放送するつもりか！！！」
「えっ！？」
「なっ！？」

「ふはははははっ！この駅の周辺には、何百・・何千ものやじ馬どもが、集まっている。いや・・・音量を上げれば、町中に響くかな・・死のメロディが。」

「大量無差別殺人だと！？」

「この不公平な世界を、知らずに生きるのは罪だ。よって、死神が罰を与えに来た。死という名の罰をな！！」

「なっなによそれっ！あんた、バカじゃないの！！」

「ふっ、まあいい。おめぇら、後は任せたぞ！」

そう言ってエリゴールは、壁を突き破りどこかへと姿を消した。

「待てっ！逃げるつもりか！・・・くそっ！ナツ、グレイ2人でエリゴールを追うんだ。」

「「むっ」」

「そうだな、ここは俺とエルザとルーシィがいれば十分だ。お前ら2人だったら、エリゴールにも勝てるだろうし。」

「何をしてる、早く行け！！」

「「あいさー」」

ナツとグレイは、エリゴールを追って行った。

そして、俺たちは4・50人の男たちと向かいあって、戦闘の準備

をした。

今から、それぞれの戦いが始まる。

占拠のち戦闘（後書き）

今回の使用能力はこちらでしてよ！

原作名：ＲＡＶＥ
能力名：ワープロード
種類　：ＤＢ（ダークブリング）
使用者：キング（ゲイル・レアグローブ）
能力内容：
　瞬間移動。
　人や物を瞬時に送ったり呼び寄せたりできる。

騎士（ナイト）のち剣士（サムライ）（前書き）

戦闘シーンは難しい・・・

騎士（ナイト）のち剣士（サムライ）

ｓｉｄｅエルザ

ナツたちの方にも何人か行ったが、あの程度なら大丈夫だろう。
あの２人は強いしな。

「よし、ナツとグレイはいったな。エルザ、俺たちもさっさと片付けて追いかけようぜ。」

「ああ、そうだな。しかし、人数が多いな・・・。ヴェルとルーシィ、半分は任せてもいいか？」

「えっ、私も・・・」

「了解だ。」

ヴェルがそう言ってきたので賛同したが、予想以上に人数が多いな。
新人２人には、多少きついだろうか？
しかし、ルーシィはどうか分からんが、ヴェルは中々強いだろ。
ナツを迎えに行く際の瞬間移動の時にした、魔力探知は驚異的としか言えん。
私でも無理だ。
それに、ギルドの者の話によると、不思議な体術・魔法・道具を使うと言うではないか。
本当に興味深い男だ。
今回のこれで、少しは実力が分かるかもしれんな。
さて、考え事もこれくらいにして、目の前の敵を片付けるか。

「では、いくぞ！」

「おっす！ルーシィは下がっててていいぞ。」

「あっありがとー、ヴェル～」

そう言い、私とヴェルは駆け出す。
ルーシィは行かないのか・・・
まあいい。また今度、実力を見せてもらおう。

「ひゃはははは、こいつらバカだ！たった2人で突っ込んできたぞ。」

「それにしても、女2人の方は本当に、いい女だな～」

「本当だぜ！妖精の脱衣装でもするか！！」

下劣なやつらめ！

「これ以上、侮辱してみろ。貴様らの明日は、約束できんぞ。！」

そう言いながら、私は剣を出し敵陣に突っ込む。

「こっちにも、魔法剣士はぞろぞろいるぞ！」

相手も魔法健剣をだし、応戦する。
しかし、私からすれば遅すぎる。
剣を換装する時間、攻撃に移る時間、防御に移る時間、全てが遅い。
そんなことを考えながら、次々と武器を換装で切り替えて、敵をなぎ倒していく。

だが敵の数が多い。

「面倒だ。一掃する。」

そう言って、鎧を換装する。
通常の魔法剣士は『武器』を換装して戦う。
しかし私は、自分の能力を高める『魔法の鎧』にも換装しながら戦う。
これが私の魔法、『騎士（ザ・ナイト）』だ。
そして、今纏っている鎧は天輪の鎧というものだ。
鎧の周りに剣が舞っている。
この剣は、鎧の能力で同時に操ることができる。

「こ・・こいつ。もしかして・・・」

「舞え、剣たちよ。　循環の剣（サークルソード）」

そう言った瞬間、私を中心に剣を円状に回転させ敵を斬りつけた。

「「「ぐはっ」」」

「まっ間違いねぇっ！！こいつＦＴ最強の女・・・妖精女王（ティターニア）のエルザだ！！」

ふう、以外に早く終わったか。
しかし、まだ気を抜くわけにはいかんな。
流石にこの人数だ。ヴェルでも多少苦戦しているであろう。
そう思い、ヴェルが戦っているであろう場所を見る。
そこには、数十人の敵に背中を向けて剣を握っているヴェルがいた。
あいつは敵に背を向けるなど、何を考えてるんだ！！

「ヴェル、敵に背を向けて何をしている！」
「大丈夫だ、既に終わっている。」
「なｎ「鼻唄三丁」」
そう言いながらヴェルは、刀を鞘にしまう動作に入る。
「矢筈斬り！」
カチン！
そして、完全に鞘にしまう。
その瞬間、後ろにいた敵は全員斬られ、倒れた。
つまり立っているのは、ヴェルただ一人となったのだ。

ｓｉｄｅヴェルデ
「では、いくぞ！」
「おっす！ルーシィは下がっててていいぞ。」
「あっありがとー、ヴェル～」
そう言い、俺はエルザとは反対側の敵へと向かう。
今回は剣技のみで戦うつもりだ。

とりあえず、刀を出さんとな。
そう思い、名もない刀を換装する。
「お前バカか。そんな細い剣で、何ができる！」
「本当だよ。この人数を相手にするなんて、バカすぎるぜ。」
「ふん、数分後には悟ることになるさ。・・・オレ相手に、そんな人数で挑んだ、己の愚かさをな！」
「上等だぁ！！その自信砕いてやる。死ねぇ！」
そう言いながら、雑魚Ａが大剣を振りかざしてくる。
それをオレは、最低限の動作で避け、無防備になった腹に一撃を入れる。
「がはっ！？」
「こいつ！！確かに、少しは強いみたいだな。一斉にかかるぞ！！」
そう言い、一斉にかかってきた敵を少しずつ減らしていく。
しかし、人数が多すぎてきりがない・・・
そして、エルザの方をちらっと見たら、鎧を換装して敵を一掃しようとしていた。
よし、じゃあ俺も終わらせますか。
「覚悟はいいな？」
俺はそう言い、高速で敵の間を駆け抜ける。

「！？・・・なんともないぞ。」

「カッコつけてたくせに、失敗かぁ！！」

「ヴェル、敵に背を向けて何をしている！」

敵がある事に気づかず、何かしら言っていると、エルザの怒鳴り声が聞こえた。

「大丈夫だ、既に終わっている。」

「なｎ「鼻唄三丁」」

そう言い、刀を持っていた鞘にしまう。

「矢筈斬り！」

カチン！

そして、完全に鞘にしまう。

その瞬間、敵がようやくあることに気づく。

「ぐはっ！？」

「くっ・・・い・・いつの間に・・・”斬られた”んだ・・・」

バタバタと倒れて行き、残っているのはオレ1人となった。

「すっすごーい！！エルザもヴェルもすごすぎ！！」

「あい！エルザが凄いのは知ってたけど、ヴェルもここまで強いと

は思わなかったです。」

「俺なんて、まだまだだよ。いやしかし、エルザは流石に強いねぇ。」

「いや、私こそまだまだだ。それにしても、頼もしい新人が入ってくれたものだ。」

「とりあえず、今はナツたちを追おうぜ！」

「いや、私はまず、駅周辺の人々を逃がしてくる。ヴェルたちだけで、探してくれ。」

「了解」

「よし、では頼む！」

そして、俺たちはエルザと分かれナツたちを探し始めた。

騎士（ナイト）のち剣士（サムライ）（後書き）

今回の使用能力だだす。

原作名：ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ
能力名：鼻唄三丁　矢筈斬り
種類　：剣術
使用者：ブルック
能力内容：
　早斬りの技。
　あまりの速さと鋭さゆえに相手は斬られても気付かず、
　しばらくの間を空けてブルックの納刀とともに傷口が開いて倒れる。

本当の狙いのちメイド（前書き）

遅くなりましたが、どーぞ！

本当の狙いのちメイド

「さて、探しますか～」

「あい。」

「うん。けど、どこから探す？」

「ん～、てか2手に分かれて探さないか？」

「えっ・・・」

「俺は1人でいいから、ハッピーとルーシィはあっちを探してくれない？」

「うぅ・・・。分かった。」

「あい。それでいいです。」

何かルーシィが、不安そうだな・・・。

「大丈夫だ、ルーシィ。ハッピーや星霊たちがいるんだ。」

「うん！そうだね！！」

「じゃあハッピー、ルーシィを頼んだぞ！」

「あい。任せて！」

こうして、俺たちは分かれてナツとグレイを探し始めた。
だがしばらくして、外から駅を囲むように、魔力を感じた。
「ん？何だ、この魔力？ちょっち、外に行ってみるか！」
そして、外に出てみたら、駅全体が風に包まれていた。
とそのとき、風の外側からエルザが飛び出してきた。
「ちっ」
「うを！！エルザか。どうかしたのか？」
「ん？ヴェルか！！すまん、話は後だ。それより、エリゴール！！」
そう言って、エルザが風の壁に突っ込む。
だが、弾かれて腕に無数の切り傷ができる。
「あぐっ！」
「！？エルザ、大丈夫か！！」
「あ・・ああ。少し、怪我をしただけだ。」
「ふんっ、やめておけ・・・。この魔風壁は、外からの一方通行だ。
中から出ようとすれば、風が体を切り刻む。」
「これは一体、何のマネだ！！」
「鳥籠ならぬ、妖精籠（ハエかご）ってところか。・・・にしては

デケェがな。・・・はは。てめぇ等のせいで、大分時間を無駄にしちまった。俺はこれで、失礼させてもらうよ。」

「どこへ行くつもりだ！エリゴール！！話は終わっていないぞ！！・・・くそっ、一体どうなっているんだ。」

「この駅が標的じゃないのか・・・。」

わからん・・・。
確かここって、原作にあった気がするけど。
何か最近、原作知識が異常なぐらいなくなってるんだよな・・・。
何でだろ？まっいっか。
それより今は、エリゴールの狙いについて考えないと。
まず何故、この駅を占拠したんだ？
オレたちの足どめか？
いや、それもあるだろうが、俺たちはあいつらにとってイレギュラーだ。
ん？まてよ・・・

「！？もしかして・・・」

「ヴェル、何かわかったのか！」

「いや、ただの推測だがいいか？」

「ああ、構わない。」

「まず、この駅の占拠はおそらく、クローバー駅との交通の遮断だ。クローバーは、大渓谷の向こうにあり、交通手段は列車しかねぇ。」

「なるほど。しかし、クローバーには何が・・・!?まさか!!」

「そう、今あの街ではじーさん（マスター）どもが定例会をしている町だ。」

「くっ!!奴らの本当の狙いは、ギルドマスターたちか!!」

「おそらくは・・・」

「急いで、エリゴールを追わなければ!!ヴェル、瞬間移動で追えないか?」

「・・すまん。無理だ。あいつの魔力を探れるほど知らねえってのと、移動しているから場所が特定できない。」

「そうか・・・。どうすれば・・・」

「エルザ、ヴェル!!ちょうどいい、大変だ奴らの本当の標的はこの先の町だ。じーさんどもの定例会の会場・・奴はそこで、ララバイを使う気なんだ!!」

どうするか、考えているとグレイがやってきた。

「ちっ、やはりヴェルの予想通りか・・・」

「そうみたいだな。」

「何だ、これー!?」

「凄い風!本当、何なのよ。」

「ん？ナツにルーシィとハッピーか。ちょうどいい、全員集合したか。」

そして、今来たナツたちに、奴らの狙いについて説明する。

「えぇー、エリゴールの狙いは、定例会なの！？」

「あぁ・・・だけどこの魔風壁をどうにかしねえと、駅の外には出れねェ」

「ぎゃあああああ」

「なっ？」

「あわわ・・・」

ナツよ、この風の壁に何もなしに突っ込むなよ・・・

しかし、どうしたもんかねぇ。

「ん～、空まで覆われてるな・・・。残るは地面を掘っての脱出か。」

「地面・・・。あ～！！！ルーシィ忘れてた。」

「なっ何にが？」

ハッピーが、荷物から何かを取り出す。

「これ！！」

「それは、バルゴのカギ！！」

「何の話だ？」

「バルゴ・・・。ああ、あのメイドゴリラか！！！」

どうやら、以前行った仕事で出会った星霊のことらしい。

「バルゴ本人が、オイラん家訪ねてきて、ルーシィと契約したいって。」

「嬉しい申し出だけど、今はそれどころじゃないでしょ！脱出方法を考えないと。」

「でも。」

「ネコは黙って、にゃーにゃー言ってなさい！」

「・・・」

ルーシィが、ハッピーの口をつねりながら言う。

てか、それは酷くないか？

て言うか、確か聞いた話じゃバルゴって・・・

「なあ、バルゴって地面潜れるんじゃなかったのか？」

「あい、そう思って今出したのに・・・」

「何！？」

「それは本当か！」

「そっかー、やるじゃないハッピー！もう、何でそれを早く、言わないのよぉ！」

「ルーシィがつねったから。」

「貸して！！我・・・星霊界との道をつなぐ者。汝・・・その呼びかけに応え門をくぐれ。開け、処女宮の扉！！バルゴ！！！」

「お呼びでしょうか？ご主人様」

ルーシィが呼び出すと、メイド服をきた女性が出てきた。
ん？でも全然ゴリラじゃないな。
むしろ、かわいいんじゃないのか？

「えっ？」

「やせたな。」

「あの時は、ご迷惑をお掛けしました。」

「やせたっていうか別人！！！あ・・あんた、その格好。」

「私は、ご主人様の忠実なる聖霊。ご主人様の望む姿にて、仕事をさせていただきます。」

「前の方が、迫力あって強そうだったぞ。」

「では・・・」

「余計なこと言わないの！」

「ルーシィか・・・やるな！」

「関心してる場合じゃないぞぉ！」

「そうだった！時間がないの、契約後回しでいい？」

「かしこまりました。ご主人様」

「てか、ご主人様やめてよ！」

チラッ

「では、女王様と。」

「却下！！！」

うん、今確実に腰につけてる鞭を見ていったな。

「では、姫と・・・」

「そんなトコかしらね。」

「そんなトコなんだ！！！つーか、急げ。」

「では、行きます！！」

「おお！！潜った！！」

「よし、あの穴を通って行くぞ！」

「よくやった。ルーシィ！！」

ガシャッ

「痛っ！？」

そして、この穴を通りなんとか外には出れた。
後は、どうやって追うかだが・・・

「ん？ナツがいないぞ？」

「本当だ！あれ？ハッピーもいないよ。」

「ちょっと、魔力を探ってみっか。・・・ん？遠いな。ここは、クローバーか！」

「えぇ～、もうクローバーに行っちゃってるの！！速い・・・」

「ふむ、ハッピーのＭＡＸスピードならたやすいだろ。」

「でも、ナツがあっちに行ってくれたおかげで、瞬間移動できるな。
よし、俺に掴まれ！」

「ああ、頼む」

そして、ナツの元へと移動した。

活躍のち逃走（前書き）

ララバイ編の最終話です。

活躍のち逃走

「何だとおおおおおおおおおお！！！」

俺らが、瞬間移動でナツたちの元へ来たら、ナツがめっちゃキレてた。

そして、纏ってる炎が感情に比例して大きくなっている。

それに伴い、エリゴールが纏っている風が剥がされて行っていた。

おそらく、ナツの超高温で低気圧が発生したんだ。

風は気圧が低い方に行くからな。

「これほどの、超熱魔法！！まさか！？」

「俺がたおしてやるよー！」

「火竜の・・・」

「いっいたのか！？滅竜魔法（ドラゴンスレイヤー）の使い手が！！！」

「剣角！！！」

ナツは、全身に炎を纏い、勢いをつけて体当たりを繰り出した。

それは、見事にエリゴールにあたり、勝利を収めた。

「どうだ、ハッピー！」

「あい、さすが火竜（サラマンダー）のナツです。」

「ナツーー！！」

「ん？遅かったな。もう終わったぞ。」

「まあ、途中からいたんだけどね。」

「そうなのか？」

「全然気付かなかったです。」

「てか、ここって・・・。定例会のすぐ近くじゃん。あれって会場だろ？」

そう、会場がもう目の前にあるのだ。

結構ぎりぎりだったのな（苦笑）

「おそらくそうだな。ナツが間に合ってくれて、助かった。」

「あそこにいるのって、マスターじゃない？」

「そうみたいだな。ちょうどいい、報告に行くか！」

そういい、何やらそわそわしているマスターに声をかける。

「マスター！」

「ぐもっ！？何故、お主たちがここにおる！！」

「ちょうどこの近くで、一仕事終わらせたんだよ。」

「今回は、なっ何も壊してないじゃろな・・・」

「多分大丈夫だと思うぞ。」

そう言うことか。
おそらくマスターは、ナツ、グレイ、エルザの3人が組んだことを、ミラ辺りからの連絡で知って、心配してたんだろう。
あの3人だけだと、マジで町1つくらい消しちゃいそうだし・・・
そう思ってたら、急に不気味な声が聞こえてきた。

「カカカッ・・どいつもこいつも、根性のない魔道士どもだ。」

「「「「!?」」」」

どうやら、この声はララバイから聞こえてくるみたいだ。
ララバイから煙が出ている。

「もうガマンできん！ワシ自らが、喰ってやろう・・・」

「ふっ笛がしゃべったー！！」

「あの煙・・・形になってく！！！」

「貴様らの、魂をな！！」

「「「「な・・怪物ーーー！！！」」」」

そう、ララバイから出てきたのは、２０M近くある巨大な怪物だった。

流石にでかすぎだろ・・・

「こいつァ、ゼレフ書の悪魔だ！！」

オレたちの近くまで来ていた、四つ首の猟犬（クワトロケルベロス）のマスターが言うには、あの怪物自体がララバイそのものだそうだ。つまり、生きた魔法で、それがゼレフの魔法らしい。

「生きた魔法・・・」

「ゼレフ！？ゼレフって、あの大昔の！！」

「黒魔道士ゼレフ。魔法界の歴史上、最も凶悪だった魔道士・・・。何百年も前の、負の遺産がこんな時代に、姿を現すなんてね・・・」

こんどは、青い天馬（ブルーペガサス）のマスターが解説をする。

「さあて・・・どいつの魂から頂こうかな。・・・決めたぞ。全員まとめてだ！！」

そういい、怪物は口を開け、ララバイを行おうとする。

「ひーーっ！」

ルーシィが悲鳴を上げたのと同時に、ナツ、グレイ、エルザが怪物の元へ駆けだす。

まず、エルザが天輪の鎧に換装して、怪物の足に斬りかかった。

その後に、ナツが怪物によじ登り、顔面へ炎で強化した蹴りを入れる。

周りでは、騒ぎに駆け付けたギルドマスターたちが、「本当に魔道

士か！？」などと騒いでいる。
そして、そのギルドマスターたちに、ナツを狙ったラバイの攻撃が飛んでくる。
だが、その攻撃は当たらず、グレイの氷の造形魔法で防がれる。
造形魔法とは、魔力に形を与える魔法であり、形を奪う魔法である。
グレイは、その氷の造形魔法で、今度は攻撃を行う。
それは、怪物に当たり左胸あたりを吹き飛ばした。
その隙に、３人同時攻撃を仕掛ける。
グレイはそのまま氷の造形魔法、エルザは一撃の破壊力を上げる鎧『黒羽の鎧』を纏い、ナツは左右の手の炎を合わせた『火竜の煌炎』を使う。
これが、見事に怪物へ当たった。
実に見事な、連携プレーである。
誰もが、終わったと確信している。
だが・・・

「油断大敵だぞ。」

「え？」

その瞬間、まだ力尽きていなかった怪物の攻撃が３人に迫ってくる。
だが、全員終わったと思っていたため、防御が間に合いそうになく焦った表情になっている。

「縛道の八十一　断空（だんくう）」

その瞬間、３人の前に透明な壁が出てきて、怪物の攻撃を防いだ。
俺は、まだ終わってないと分かってたため、すぐに行動に移れた。
断空とはブリーチの鬼道のひとつである。
本来は、破道を防ぐものだが、俺のは特別製で、魔力が宿っている

ものは防げるようになっている。
「3人とも、気ぃ抜き過ぎ！！」
「す・・すまない。助かったぞ、ヴェル。」
「マジで、サンキューな！」
「あんにゃろー、しぶとすぎっだろ！！！」
「だが、もう大分弱っている。終わらせるぞ！！」
「残りは俺がやる。俺も戦いたいんだ！」
「しかし、弱っているとはいえ、一人で大丈夫か？」
「任せなさーい！すぐに終わらせるよ。」
「そうか。なら、頼む。」
そして、エルザたちが少し離れる。
ん～、さっき縛道を使ったから、とどめは破道でも使うか。
「ぐっ・・貴様らゆるさんぞー！！！」
怪物は完全に、ぶちギレており、俺に突進してくる。
「破道の四　白雷（びゃくらい）」
指先から、一条の雷を放ちながら避け、背後を取る。

「終わりだ。破道の六十三　雷吼炮（らいこうほう）！！」
そう言い、雷を帯びた爆砲を、怪物目がけ放つ。
怪物はこれを避けれずにくらい、今度こそ倒すことができた。
「ふう、今度こそ終わったな。」
「ふむ、見事じゃ」
「流石は、ヴェルだな。」
「そうだよな。見たことない魔法だし。」
「強ぇなあ、ヴェルは。今度勝負しようぜ！！」
「いや、３人が大分弱らせてたから、あんな簡単に倒せたんだと思うぞ。」
「それでも、凄かったよ、ヴェル！！」
「あい、凄かったです。」
「そう言われると、照れるな。・・・あっ！？」
「ん？どうしたんじゃ、ヴェル。」
「あれ・・・」
俺が指差した方を、全員が振り向く。

「「「「！！！」」」」

そこには、今の戦いで、無残にも崩れ落ちた定例会の会場があった・・・

「ぬあああああ！！定例会の会場が・・粉々じゃああ！！」

「あはは、見事にぶっ壊れちまったな（笑）」

ナツ、全然笑いごとじゃないぞ・・・

「捕まえろー！！」

「よし、任せろ！！」

「お前は、捕まる側だーーー！」

俺たちは、ナツが来たら返り討ちにしてやる、とか思いながらＦＴへと逃げ帰りましたとさ。

活躍のち逃走（後書き）

今回の能力はＢＬＥＡＣＨからでしたー。

原作名：ＢＬＥＡＣＨ
能力名：破道の四　白雷
種類　：鬼道
使用者：朽木白哉、朽木ルキアなど
能力内容：
　指先から一条の雷を放つ

原作名：ＢＬＥＡＣＨ
能力名：破道の六十三　雷吼炮
種類　：鬼道
使用者：志波空鶴など
能力内容：
　雷を帯びた爆砲を放つ

原作名：ＢＬＥＡＣＨ
能力名：縛道の八十一　断空
種類　：鬼道
使用者：朽木白哉など
能力内容：
　防御壁を作り出し、八十九番以下の破道を完全に防ぐ

依頼のち大会（前書き）

今回から、オリジナルストーリーです。
うん、駄作な予感・・・

依頼のち大会

『さー、やってまいりました、ＦＴスポーツ大会！その名も・・・妖精杯（フェアリーカップ）！！！』

「「「うをぉーーーー」」」

『今回の種目はこれだ！！！』

そう言いながら司会者・・マックスが取り出し物は、テニスラケットだった。

『そう、テニスだー！もちろん、魔法もありだ！！！そして、優勝者には何と・・・賞金２０万Ｊだ！！』

「「「うをぉーーー」」」

うん、凄い盛り上がりだな（汗）

はぁ、俺も出ることになってるんだが、めんどくさいな。

「はぁ・・・」

どうして、こんなことになったかと言うとだな・・・

――数日前――

ララバイ事件から数日がたち、俺はのんびりと過ごしていた。
のんびりと言っても、生活費稼ぎをしててね。
そして、この日もいつも通りリクエストボードを見ていた。
そしたらこんな、依頼があった。

【盛り上がるイベントを企画してくれ。報酬は１０万Ｊ】

企画するだけで１０万Ｊはいい仕事だと思う。
が、その下に書いてある依頼主に驚いた。
そこには『ＦＴギルドマスター　マカロフ』と書いてあった。
・・・おい、じいさん。自分の所のギルドになに依頼してんだよ！
まあ、割のいい仕事なのには変わらんから受けることにした。

「じいさん、これ受けてやるよ。」

「ん？おお、受けてくれるか！！楽しいイベントを考えてくれよ～。」

「まあ、あまり期待せんでまっといてくれ。」

んで、数時間いろいろと考えたんだけど、シンプルに賞金付きで、魔法ありのスポーツ大会でもしようぜっ！ってマスターに行ったら、

「おお、それはいい考えじゃのお！魔法ありだと、見てる方も余計に楽しいじゃろ。流石は、ヴェルじゃ！」

うん、何かめっちゃ気にいったみたいでした。
そのあと、多少大会の準備（場所確保など）を手伝ったら、依頼完

了となたった。
賞金は何でも、マスターの自腹で２０万Ｊ出すことになった。
んで、俺は出る気は全くなかったんだが、ルーシィが、

「ヴェル～、今度の大会一緒にでて～！家賃代ゲットのためにお願ーい」

と言ってきた。
そんで、最初は断っただが、他のやつが既にペアを組んでて中々決まらないようだったので、しょうがなく大会に出ることになった。
ちなみに今回の大会は、２人１組が参加条件らしいのだ。

「ありがとー、ヴェル。宜しくね！」

――現在――
という訳なんですよ。

「あっヴェル、見つけた！今日は頑張ろうね～」

「はぁ・・・。まあ、やるからには目指すぞ、優勝！！」

「お～！」

テニスと言ったら、どこぞの王子様マンガの能力使うか。
でも、何故かスポーツ系の能力を使うと、性格まで変わるんだよね・・・
まあ、スポーツ系マンガの能力は使うところがないからいいけどさ。

「ルーシィ。俺さ、多分試合中に、性格変わると思うけど気にしないでね。」

「？？よくわかんないけど、了解～！」

そして、大会の対戦表が発表された。
どうやら、トーナメント形式らしい。

第一試合
ヴェルデ／ルーシィ　ＶＳ　エルフマン／グレイ

第二試合
アルザック／ビスカ　ＶＳ　ワン／ジョイ

第三試合
ナツ／ハッピー　ＶＳ　ジェット／ドロイ

第四試合
ラキ／ウォーレン　ＶＳ　エルザ／ミラ

第五試合
マカオ／ワカバ　ＶＳ　カナ／メイ

シード
マカロフ　ＶＳ　第五試合勝者

「・・・いきなりかよ！」

「う～、緊張してきた・・・」

「相手は、エルマンとグレイか」

「何かいきなり、強い相手とあたっちゃったね・・・」

「そうだな・・・。まあ、でも大丈夫だ。俺たちは強い！！！」

「うん！そうだね！よーし、頑張るぞぉー。」

依頼のち大会（後書き）

とりあえず、駄作の予感的中と言う事で・・・
バトルはバトルでも、スポーツものです。
次回から対戦に入ります。
ちなみに、一人だけオリキャラを入れました。
わかるかな？
登場するときに、また説明します。
面白くないかもしれませんが、見てやってください。

漢のちバーニング（前書き）

バトルを書くのも難しいけど、スポーツものを書くのも難しい・・・

漢のちバーニング

『さ～、ついに始まります。第一試合の選手はこいつらだー！』

特設コートにヴェル、ルーシィ、グレイ、エルフマンが現れる。

『選手の紹介だぁ！まずは実力派チーム。ここで漢（おとこ）を見せれるか～、エルフマン！そして、今日もいい脱ぎっぷり、グレイ！』

「本気でやってこそ漢！！」

「脱いでねぇよ！！」

それぞれ、反応を示す。

ちなみに、グレイは上半身裸だったりする。

『そして、その対戦相手は、新入りチームだ！強いだけじゃない、ツッコミも一流の美少女、ルーシィ！！そして、摩訶不思議な技を使い常識から外れた男、ヴェルデ！！』

「ツッコミが一流って何！！」

「むっ、俺は常識的だぞ。」

ルーシィは早速ツッコミを入れる。

『どちらが勝つのでしょうか！ここで、簡単にルールのおさらいだ。今回は時間の都合上１ゲームのみで行う。つまり勝利条件は４ポイ

ント先取することだ。そして、魔法の使用だが、相手を直接攻撃しない限り可能だ。あくまでも直接だから、間接的・・例えばボール越しでの攻撃はＯＫだ！さて、おさらいはこれくらいにして、選手はラケットを持って準備をしてくれ！』

「「はいよ（おう）」」

「はいヴェル、ラケット」

「サンキュー」

ヴェルはラケットをルーシィから受け取る。

その瞬間・・・

「ぬをぉーーー！！グレイトー！！燃えてきたぜぇ～。カモンベイベー！！」

「えっ・・・。ヴェ・・ヴェル？」

「かかってきやがれ！！ここは、俺様に任せとけー！！」

『ど・・どうしたのでしょうか！ヴェルのテンションが異常なことに…』

「グレイ、エルフマンが相手なら大歓迎！！ウェルカ～ム。ははは、燃えるぜぇ、バーニング！！ベリィベリィバーニング！！！」

「どうしちまったんだ、ヴェルのやつ・・・」

「異常に燃えてるな・・・。だが、漢だ！」

この異常なテンション・・・バーニング状態は、テニスの王子様の河村の性格だ。
おそらくヴェルは、能力で河村の技を使うつもりなのだろ。

「そういば、性格が何とかって言ってたっけ・・・。でも、これは変わり過ぎよ～！」

「さっさと、始めるぜぇ～！！どっからでもきやがれ！！へい！！」

『で・・では、ヴェルも待ちきれないようなんで、グレイ・エルフマンチームボールで始めてください！！』

ちなみに、サーブ権は2球ごとに変わる。

「サーブは任せたぜ、エルフマン」

「おう、ヴェルに負けない、漢のサーブを見せてやる。ビーストアーム、黒牛」

そう言って、自分の腕に魔物の腕を接収させる。

「いくぜっ！！漢のサーブ！」

ズドンッ！！

ものすごい勢いのボールは、ヴェルたちのコートへ決まった。
ちなみに、このボールには魔法が掛けてあり、破裂したりする可能性はない。

「ひーー、速すぎでしょ！！」

「アンビリーバボー！流石だぜ。ますます、燃えてきたぜぇ！！」

「次も決めるぞ。はっ！」

そして、またもやものすごい勢いのボールが飛んでいく。

「無理だって～！！」

「俺様に任せな！！うをぉ！！」

バゴンッ！！

今度は、ヴェルのリターンが見事に決まった。

「あれを片手で返すとか、なんちゅうパワーだよ・・・」

「漢だな。」

「よっしゃー！！グッジョブ、俺！！さあさあ、ゴー、ネクストターン！！」

「なんか、あのテンションやりずれーな・・・」

グレイは若干、ヴェルに引いているようだ。

「さすがヴェル！！私も負けてられないね！」

次のサーブは、ヴェルチームだが、ルーシィが打つようだ。

しかし、ルーシィの魔法は星霊魔法のため使いどころがない。
つまり、普通のテニスしか出来なかったりする。

「いくわよ！そーれっ！！」

女性にしては速いサーブを打つ。

「やるじゃねぇか、ルーシィ。だけど・・・。アイスメイク、棍棒（クラブ）」

そう言って、ボールに向けて槍騎兵（ランス）のように、氷を1本放つ。
氷がボールに当たり、終わりかと思ったが、その勢いのままヴェルたちの陣地へとボールを押し返し、そのまま決まった。
これで、２－１だ。

「いやー！！ボールと一緒に氷の棒まで飛ばさないでよ～！」

「グレーイトッ！！面白くなってきたぜぇ！！もっと楽しませてくれよぉ！！！」

「う～、今度こそ・・・。それっ！！」

さっきより、気持速くなったサーブをルーシィが放つ。
しかし、グレイが先ほどと同じように魔法で返してきた。

「またー！！」

「俺に任せろ、ルーシィ！！何度も同じ手は通用しないぜ！！」

そう言い、ヴェルはある構えを取る。

「燃える、燃える、燃える！！俺は今、氷を溶かすほど燃えてるぜー！！バーニング！！！」

そして、ヴェルは渾身の力を込めて、片手でフラットショットを放つ。

そう、これは『波動球』である。

「俺が返してやる！！」

エルフマンがこれを受けようとする。

「ぬをおおおおぉぉぉぉ！！！っ！？」

しかし、ボールを捕えたものパワー負けをし、ボールとラケットが後ろへ飛んでいった。

「すっすげぇ・・・。エルフマンがビーストアーム状態で、パワー負けするなんて・・・」

「な・・なんてパワーだ。手が痺れてやがる・・・。だが、漢ならば諦めてはだめだ！！」

「うをおおお！バーニング！！パワーでは負けーん！！！」

次のポイントも、エルフマンのサーブを、ヴェルが波動球で返して決めた。

つまり２－３で、ヴェル・ルーシィチームのマッチポイントである。

「やったー！マッチポイントだあ。」

「最後まで燃えていくぜぇ！！！」

「くそっ！なんてパワーだ！！」

「エルフマン、落ち着け。俺に考えがあるから、普通にサーブをしてくれ！」

「漢ならパワーで勝ちたい所だが・・・。ここは、任せた！それでも、全力のサーブをくらわしてやる！はっ！！！」

エルフマンはその日一番のサーブを放つ。
そして、そのボールがネット越えた所で、グレイが動く。

「アイスメイク、城壁（ランパード）！」

そう言うと、ネットの部分に巨大な氷の壁ができる。

「ちょ・・ちょっと、それ卑怯じゃないの～！！！」

「バーーニング！！氷ごと打ち砕いてやるぜぇ！！！」

そう言いながら、ヴェルがボールに向かって、前へダッシュする。
そして、そのままフラットショットを放つ。
これは『ダッシュ波動球』だ。

「バーーーーニング！！！これで終わりだーーーー！！」

「「！？」」

バリンっ！
ドスンッ

そして、放たれたボールは氷の壁を打ち砕き、見事に相手陣地へと突き刺さった。

『ゲームセットだぁ！！この熱すぎる戦いは、ヴェル・ルーシィチームに軍配が上がったぁー！』

「ぬをおおお、バーニング！最高にホットだったぜぇ！！」

「やったー！勝ったー！！」

「くそー、完全にヴェルにやられたぜ。」

「ああ、完敗だな。それにしても、ヴェルは漢だな！」

こうして、白熱した第一回戦は終了した。

結果
２－４
勝者、ヴェル・ルーシィ

漢のちバーニング（後書き）

技紹介だぜぇ！バーニング！！！

原作名：テニスの王子様
能力名：波動球・ダッシュ波動球
種類　：テニス技術
使用者：河村隆
能力内容：
　渾身の力を込めて放たれるフラットショット。
　これに、前に一気に踏み出す力を利用したものをダッシュ波動球という。

一回戦のち終了（前書き）

先に謝っときます、すいません。
今回は試合経過の解説のみです。
しかも、短いです・・・

一回戦のち終了

今、テニス大会は順調に試合が進んでいる。

第二試合

アルザック／ビスカ　ＶＳ　ワン／ジョイ

アルザックの銃弾魔法（ガンズマジック）、ビスカの銃士（ザ・ガンナー）により、２人は向かってくるボールを狙い撃ち、相手陣地へ叩き込む作業を繰り返していた。

一方のワン・ジョイチームは、ジョイの支援魔法のマッスルスピークでワンをマッチョにし、ワンのアイアンドッグで腕を鉄の犬に変形させて、応戦していた。

しかし、３－２でアルザック・ビスカチームがマッチポイントになったとき、ワンの犬が向かってきたボールを食べてしまい、呆気ない幕切れとなった。

結果

４－２

勝者、アルザック／ビスカ

第三試合

ナツ／ハッピー　ＶＳ　ジェット／ドロイ

こちらは、とても燃える試合だった。

いや、例えではなく本当に燃えていた。

試合内容自体は、一方的なものだった。

ナツが打つボールは全て燃えているのだ。
ジェットは魔法の神速（ハイスピード）でボールに追いつけるが、力負けしてまともに返せない。
ドロイは魔法の植物（プラント）の力で返そうとするが、炎と植物、明らかに不利でこちらもまともに返せずにいた。
こうして、ジェット・ドロイはいいとこなしで終わったのだ。

結果
４－０
勝者、ナツ／ハッピー

第四試合
ラキ／ウォーレン　ＶＳ　エルザ／ミラ

こちらの試合も、一方的だった。
まあ、エルザとミラが組んでいるから、当然な気もするが・・・・
ラキはラケットを木材で作っており、その木を自在に変形させて戦っていた。
ラキの魔法は木の造形魔法だ。
そしてウォーレンは、エルザ・ミラの心を読んで行動を起こそうとしていた。
しかし、エルザの心は闘争心むきだしで恐かったらしく、かなりビビっていた。
ミラに関しては、何故か全てエルザの応援だったらしい。
だが、応援しながらまともに返球するのだ。
こんな2人に対応できるわけもなく、結局ウォーレンは役立たずだった。
一方のエルザ・ミラは魔法を使わず、普通にテニスを楽しんでいた。
まあ、かなり一方的だが・・・

結果
４－１
勝者、エルザ／ミラ

第五試合
マカオ／ワカバ　ＶＳ　カナ／メイ

この試合は、ある意味一方的（？）だった。

まあ、結果から言うとカナ・メイチームの勝ち（不戦勝）だ。
何故かというと、それは以下の通りだ。

ワカバが、煙魔法を使い周囲を煙だらけにする。（目くらまし）
←
マカオがサーブを打つ。（マカオの視界もほぼ０）
←
ワカバの後頭部直撃
←
２人が大喧嘩

その結果、２人とも失格となった。
燃える戦いだった・・・ワカバとマカオの喧嘩がだけど。

結果
０－０（不戦試合）
勝者、カナ／メイ

こうして、無事（？）一回戦は終了した。

一回戦のち終了（後書き）

本当に、すいません・・・

ちなみに、オリキャラはカナと組んでるメイです。
簡単に紹介します。

名前：メイ
性別：女
魔法：紙魔法
　紙を自由に操る。
　また、1枚の紙を増やせ、それを重ねていくことで、超硬度の盾を作ることができる。
　ただし、炎や水には弱い。

ナルトに出てくる小南のパクリとか言わないでね・・・（汗）
ちなみに、小南の紙は炎や水も押し返すことが可能らしい。

決勝のち決着（前書き）

遅くなってすいませんでした。

そしてもう一つ謝罪が……

２回戦を都合の為省かせてもらいます。

オリキャラのメイは別の話で出します。

本当に、ごめんなさい。

決勝のち決着

『さー、いよいよ決勝です。決勝は3チームいるので総当たり戦です！ではここまで残った猛者たちを、紹介だ～！こんなに燃えているバーニング野郎は初めてだ、驚異の新人チーム、ヴェル・ルーシィ！！！』

「ルーシィも頑張れ～！」

「ヴェル今回も、熱い戦いをよろしく！！」

『そして、こちらも燃えている！そして、格の違いを見せつけている。この2人、正にS級！！エルザ・ミラ！！！』

「ミラちゃ～ん、今日もカワイイ！！！」

「エルザは、かっこいいぜ！！」

『最後に、忘れてはいけないのが、この人！我らがギルドマスター、マカロフ！！！』

「じーさん、腰は大丈夫か～？笑」

「あの～、ちょっといいかしら？」

『なんだい？ミラちゃん』

「私、棄権しようと思うの。」

『えぇぇぇ！？ここまで来て、棄権するの！！！」

「だからねぇ、エルザとマスターを1つのチームにしちゃったら面白そうじゃない？」

「えっ……」

『非常に面白そうな提案ですが、両チームどうです？』

「エルザとじいさんがチームか。面白いからＯＫだ！」

「私も、マスターとなら問題ない」

「うむ、ワシもそれでよいぞ！」

『と言う事で、ヴェル・ルーシィチームとエルザ・マスターチームの決勝戦が急遽決定した～！！！』

「「「うをぉぉぉぉ！！！」」」

「ヴェル～、あの二人を相手にするのぉ（泣」

「おお、楽しそうじゃないか！」

「うぅ……」

『それでは、ヴェル・ルーシィチームのサーブで初めてください！』

「じゃあ、ヴェルよろしくねぇ！」

「ああ」

「あれ？何か、さっきまでの暑っ苦しいのがなくなってる。」

「気にするな」

「今度はめっちゃ冷静になってる！！」

今のヴェルは、落ち着き払っていて口数が少なくなっている。
と言うのも、今回は河村でなく手塚バージョンにしているからだ。

「行くぞ！」

そう言い、ヴェルはサーブを打つ。
そして、エルザがそれを返し、またヴェルがそれを返す。
しばらく、エルザ・マスターとヴェルのラリーが続いていたが、エルザがあることに気づく。

「……どう言うことだ？さっきから私たちの返球が全てヴェルの元へ吸い寄せられていく！！」

「そうじゃな。ヴェルが何かしてるっぽいのぉ。」

ヴェルは最初の返球以来一歩も動いていないのだ。
そう、これは手塚国光の技である「手塚ゾーン」である。

「中々やっかいじゃのぉ。」

「はい。しかも的確に私たちの隙を狙ってきますし。」
ちなみに今は、エルザは天輪の鎧を纏ったときのように後ろに無数のラケットを漂わせ、的確にコントロールしてボールを打ち返している。
そしてマスターは、エルザの取りこぼしを後ろで手を伸ばしたりしてフォローしている。
「どうしましょう？……なっ！？ドロップショットだと！」
ヴェルは急にドロップショットを打った。
「しかし、これなら間に合う！！」
エルザはボールが跳ねて向かってくるであろう場所へ、何とか間にあった。
しかし、それは跳ねてくればの話だ。
「バカな！？跳ねないだと！！！」
「零式ドロップショット」
ボールは跳ねずにバックスピンしていた。
これも手塚の技だ。
『決まった～！どうしてボールが跳ねないんだ！！！』
「本当にやるのぉ」

「あの、ドロップショットは地面に落ちる前に拾わないといけないのか……」

次もヴェルの零式ドロップショットに対応できず、ヴェルチームのポイントとなった。

２－０

「ワシらも頑張るかね。」

「はい。サーブはマスターに任せます」

「まかせんしゃい。」

そう言ってマスターは、巨人（ジャイアント）の魔法で巨大化した。そして、ボールを空高く上げて渾身のサーブを放つ。

「そりゃっ！！！」

ドゴォン！！！！

「「……」」

ヴェルとルーシィが固まった。

ボールは、さっきの零式ドロップショットと同じで跳ねなかった。ただ違うのは、ボールが地中深くに埋まっていた。

「何て威力だ……」

「あんなの打ち返そうとしたら、死んじゃうから！！」

「よし、ルーシィ相手サーブは捨てよう……」
「そうするしかなさそうね……」
結局相手のサーブは捨てることにしたようだ。
そして、次も同じようにサーブが決まる。
2―2
「こっちサーブのうちに決めないと負けるな。」
「そうだね。がんばって、ヴェル！」
「一応ダブルスだからな。」
そしてさっきと同じくヴェルは、手塚ゾーンでボールを吸い寄せながら戦う。
「ん？じいさんが動くか……」
マスターが何か仕掛けてくる気配を感じ取ったヴェルは、ボールに手塚ゾーンを応用した回転をかけた。
「エルザ、後ろに流せ！ワシが返す。」
「はい。」
そして、マスターは巨大化して力を込めて打ち返す。
誰もが決まったと思った。

しかし……

『ア・・アウトだ！ボールがコートの外へそれてしまった！マスターが力み過ぎたのか！！！』

これは、手塚ゾーンの応用技「手塚ファントム」だ。

「バカな……今までと同じように、コート内へ入るように打ったはずじゃ！！」

「マスターがミスをするとは思えん。ヴェルが何かしたのか……」

「まずいのぉ。タネが分からんから、対処のしようがない。」

「最後のサーブだ。行くぞ。」

そしてそのサーブを打ち返すと思っていたが……

「ふぎゃっ！？」

ちょっと動揺していた、マスターが空振りをして、顔面にボールをぶつけてしまった。

『えっと……サーブが決まったため、ヴェル・ルーシィチームの優勝が決定だぁ！！』

「やったー！！でも、ヴェル一人で優勝したようなもんね（汗」

「楽しかった！久しぶりにスポーツしたから、はしゃぎ過ぎたかな」

こうして、あっけない幕切れとなったとさ。

決勝のち決着（後書き）

ダメだ……
駄作すぎる。
ひたすらごめんなさい。

今日の技はこれです。そしてごめんなさい。

原作名：テニスの王子様
能力名：零式ドロップショット
種類　：テニス技術
使用者：手塚国光
能力内容：
　全くバウンドせずバックスピンする

原作名：テニスの王子様
能力名：手塚ゾーン、手塚ファントム
種類　：テニス技術
使用者：手塚国光
能力内容：
　特殊な回転をかけることで、相手が打ち返した球が自分のところへ戻ってくる。
　手塚ゾーンの応用で相手の打球を全て外側に追い出し、アウトにする。

主人公のち紹介（前書き）

いまさらですが、主人公紹介を。

主人公のち紹介

名前：ヴェルデ・フッド

テンプレートの如く転生を果たした男。
転生後の容姿は、ワンピースに出てくるロロノア・ゾロのまんまである。
性格は冷静沈着で、仲間思いだが、敵には容赦がない。
特に仲間を傷つけたものは殺しはしないが、それ相応の罰を下すまで許さない。
ＦＴ内では常識人だが、能力が能力のため、ギルド内では規格外な奴として認知されている。
そして、何故だかＦＴの原作知識がどんどん薄れていき現在（悪魔の島時点）では、ほとんど覚えていない。
その他のマンガ等の記憶はあるらしい。
現在の魔力量は呪霊錠を付けた状態で、エルザと同等かそれ以上だ。
しばらく呪霊錠を外していないため、外した状態での魔力量は不明。

能力：
ジャンプ・マガジンの技・道具の使用。
ただし、ＦＴの技などは使えない。（習得はできる）
この能力で使う技や道具は威力・効果などによって、魔力消費が変わってくる。
例えば、仙豆などの、全体力回復・怪我完治などの効果があるものは相当な魔力が必要。
ちなみにこの時消費した魔力は、これらの回復アイテムでは回復しない。
そのため、一気に何個もこういった道具は出せない。
ただし、作り置きができる。

技に関してだが、体術系は基本的にはヴェル自信の筋力・体力次第で威力が変わってくる。
技に身体がついていけない場合は、魔力で補って使用している。

主人公のち紹介（後書き）

ご都合主義なとこがあるが、勘弁を……
変な所、分からん所があったら言ってください。

眠りのち目覚めの予感（前書き）

今回から原作に戻りまーす。

眠りのち目覚めの予感

テニス大会の翌日。
今俺はギルドにいる。
なんか昨日の大会の後に、評議の使者がきてエルザを逮捕して行った。
しかし、これはただの儀式だったそうだ。
本来なら罰は受けずに、昨日中に帰れた。
だが、ナツが暴れたせいで1日だけ牢獄されたのだ。

「やっぱりシャバの空気はうめえ！！！最高にうめえっ！！自由って素晴らしい。フリーーーダァーーーッム！！」

「うるせぇよ！」

「もう少し入ってればよかったのに……」

マジで、ナツうるせえな（汗
自由になれて嬉しいのは分かるけど……

「そう言えば、エルザとの漢の勝負はどうなったんだ、ナツ？」

「そうだ、忘れてた！！エルザ、この前の続きだ！」

「よせ、疲れてる……」

「いくぞぉ！！」

「やれやれ」

ナツが向かって行ったが、エルザがでかい金槌で殴り飛ばした。
そして、ナツは気絶してしまった。

「仕方ない、始めよう！」

「終〜〜了〜〜！！」

「ぎゃはははっ！だせーぞ、ナツ。」

「やっぱり、エルザは強ぇな！」

確かに一撃は凄いな。
しかも、本人はあいさつ程度の一撃だったし……

「……ん？」

なんだこの感じ？
眠いな。
魔力を感じるから、誰かの魔法か？
とりあえずネギまの神楽坂明日奈の完全魔法無効化能力を発動させておく。

「どうかしました？マスター」

「いや、眠い。奴じゃ。」

マスターも気づき、うとうとしているがなんとか起きている。
他の連中はみんな、バタバタと倒れて行った。

「ミストガン」

マスターがそうつぶやいた。
そのミストガンとやらが、リクエストボートの方へ行こうとしていた。
てかこの魔力の感じは……

「ちょっといいか。」

「!?ヴェル起きておったのか!」

「ミストガン……いや、お前ジェラールだろ。」

「……久しぶりだな、ヴェル。だが、何故分かった。」

「魔力がない……だから、俺が知っているジェラールだと気付いたんだ。」

「!?魔力がないことに気づいていたのか。」

「なんじゃ、お主ら知り合いか?」

「ああ、ガキの頃にジェラールと少しの間旅をしててな。俺も結構な場所を旅してたから、意外と顔は広いぞ。」

「そうじゃったのか。」

ミストガンはリクエストボードへと再び歩を進めていった。
そして、一つの依頼をマスターの所へ持って行った。

「行ってくる。」

「これ、眠りの魔法を解かんか！」

そう言われミストガンは、出口へと向かって行きながらカウントダウンを行った。

「伍」

「四」

「参」

「弐」

「壱」

カウントダウンが終わると同時にミストガンは見えなくなり、ギルドの眠っていた連中が起きた。

「こ……この感じミストガンか！」

「あんにゃろ～！」

「相変わらずスゲェ強力な眠りの魔法だぜ」

「ミストガン？」

「ＦＴ最強の男候補だよ。」

疑問に思っているルーシィにロキが説明する。
どうやらＦＴでは、ミストガンはいつもみんなを眠らせているらしい。
昔は普通に接してたのに。
「だから、マスター以外ミストガンの顔をしらねぇ」
「いんや……俺は知ってるぜぇ。」
「ラクサス！！」
「いたのか！！」
「もう一人の最強候補だ。」
どうやら、このミストガンを見たことがあると言っている奴は、ラクサスというらしい。
「それと、そこの新入りも知ってるぞ。」
「何！？マジか、ヴェル！！」
「ああ、今会った。と言うか、知り合いだった。」
「あの、強力な眠りの魔法を破ったのか……」
その後、ナツがラクサスに勝負を挑み、二階に上がろうとしたところを、マスターに巨大化した腕で叩き潰された。
なんでも二階のリクエストボードには、Ｓ級のクエストがあるらし

い。
それを受けるには、マスターに認められなければいけないらしい。
そしてその日はそのまま家に帰った。
夜になり家でくつろいでたら、また変な気配を感じた。
この嫌な感じは……
誰かが、あの封印を解こうとしてるのか？
面倒だが、様子を見に行くしかないか。

そして、次の日の朝俺はギルドに来ていた。

「じいさん、ちょいと用事が出来たからしばらく留守にするよ。」

「ん？そうか、気おつけるんじゃぞ。」

「おう！行ってっきます。」

ギルドをでたら後ろから、S級がどうの、悪魔の島がどうのと聞こえてきて騒がしくなった。
なんかあったのか？
気になるけど、いいっか。
騒がしいのいつも通りだし。
そんじゃあいつの気配をたどって行くか。

「デリオラの封印だけは解かせねぇ……」

眠りのち目覚めの予感（後書き）

今回の能力ですよ～。

原作名：魔法先生ネギま！
能力名：魔法無効化（マジックキャンセル）能力
種類　：特殊能力
使用者：神楽坂明日奈
能力内容：
　魔法を常時・選択的に打ち消すことができる

海賊戦のち出航（前書き）

どうもです。
最近更新スピードが落ちてしまってすいませんです。

海賊戦のち出航

俺は今、港町のハルジオンに来ている。
目的の封印されたデリオラは、どうやら現在ガルナ島にあるようだ。
そして、そのガルナ島に行く手段を探しているのだが……

「なんだ、お前等もか……さっきの奴らにも言ったが、あの島の名前を聞くだけでも嫌だからかんべんしてくれよ。」

とまぁ、こんな風に断られ続けている。
どうやらガルナ島は、悪魔の島と呼ばれていて、呪いだ何だと嫌な噂があるらしい。
だが困った……
どうしたもんかなぁ。
ん？あの船は……
俺は港に泊まっているある船を見つけた。
あれって海賊船だよな。
ちょっと行ってみっか
そして、俺は海賊船の方に行き、船長らしき人物に話しかける。

「おい、あんたが船長か？そうだったら頼みがあるんだが。」

「あぁ？確かに俺が船長だが、何だてめぇ？」

「そうか。頼みってのは、ガルナ島に連れてってもらいたいんだが。」

「冗談じゃねぇ！あんな島近寄りたくもねぇ。」

「……そうか。お前等、海賊だよな？」

「それがどうした！殺されたくなかったらさっさとどっか行きな！」

「海賊ならいいか。」

「は？何がだよ。」

「力ずくで言う事聞いてもらうぞ！！！」

「！？」

そして俺は船に上がりこむ。

「ん？誰だお前？」

「なんだ？」

船上にいた奴らが騒ぎだす。

そして俺の後ろから、船長が追いかけてきた。

「野郎ども、そいつは敵だ！殺っちまえ！！！」

「「「わかりやした！！」」」

そして船員たちが俺を囲んだ。

「んじゃ殺りますか」

そう言って俺は刀を3本出す。

「！？こいつ魔道士か！！」

「安心しな。魔法は使わねぇよ。」

今回は剣技で戦おうと思う。
海賊相手だったら、やっぱり海賊狩りと言われてた男の技だろ！
そう、今回はゾロで行こうと思う。
そして俺は刀を両手に持ち、残り一本を口にくわえた。

「なっ何だ、そりゃ！？バカにしてんのか！！」

まぁ普通、刀をくわえて構えたら、そう思うよな。
だが……

「今の俺は三刀流だ。言っとくが、強いぞ！！」

「ふざけるなぁ！！！死ねぇぇぇぇ！！」

そう言いながら、海賊どもが襲ってくる。
だが俺は、刀を巧みに操り倒していく。
大分人数も減ったかな。
残りはまとめて倒すか。
そうして俺は、両手を交差する構えをとる。

「なっ何だ！？刀が揺れている！！」

「艶美魔（えんびま）　夜不眠（よねず）、鬼斬り！！」

そう言って俺は、敵陣へと突進した。

そしたら、敵が吹き飛び、立っているのは俺と船長だけとなった。
「後は、お前だけだぜ。船長さん！」
「っく。くそったれ……」
「さっ、痛い目見たくなかったら、ガルナ島に行くぞ！」
「かんべんしてくれよぉ……」
船長がまだ渋っているので、少し睨みつける。
「ひっ！わ・・分かったよ……」
「それでいい。」
いざ出発しようとすると、いつの間にかある人物が乗船していた。
「ヴェル、貴様ここで何をしている？」
「だっだれだ！てめぇ！！」
「貴様は黙っていろ。」
「ひっ！？」
「ん？エルザか。お前こそどうして、こんな所にいるんだ？」
しかも、めっちゃ怒っているし……

「掟を破った者たちへの、仕置きに行くだけだ。それより、ヴェルもナツたちに同行しているのか？」

「掟を破った？ナツと同行？何のことかさっぱりだ？俺はただあの島に、私用があるだけだ。それにマスターにもしばらくは、ギルドを留守にするって言ってから来たしな。」

「ふむ、そうだったか。だが、今あの島はＳ級クエストがある島だ。無暗に近づかない方がいい。だから今日は帰れ。」

「Ｓ級ねぇ。多分俺の目的のものが関係してるっぽいな。」

「ん？どういうことだ？」

「あの島には、封印されているあるものがいるんだ。」

「あるもの？」

「あぁ。おそらく奴も、ゼレフ書の一体だと思う。しかも強力な。あのララバイより強力だと思う。１０年前までは厄災の悪魔と呼ばれていたが、ある人物により封印されていたんだ。」

「ゼレフだと……ん？封印されていた？」

「あぁ、何故かは知らんが、今そいつの封印が解けかかっている。大体、デリオラは北の大陸の氷山に封印されていたはずなんだが……」

「そうか。確かに関係はありそうだな。」

「あいつが解き放たれるとまた、大勢の人が犠牲になる。せっかくあの人の犠牲で封印したというのに……まぁ俺は封印を解こうとしている、バカを倒すだけだ。」

「そうか……ヴェルの私情だ。私は口を出すまい。だが、困ったことがあったら力になる。いつでも頼ってくれ。」

「あぁ、ありがとな。」

「ふっ、仲間だったら当然だ。」

「そういや、エルザはどうしてここに？」

「うむ、困ったことに、ナツ・ルーシィ・ハッピーがS級クエストに無断で行ってしまったんだ。そして、それを止めに行ったはずのグレイも帰ってこない……」

「あいつら……まだあいつらの実力じゃ早すぎる。」

「あぁ。それに、あいつらはマスターの信頼を裏切った。仕置きをせねばならん。」

「そういうことか。まぁこれはあいつらが悪いな。ガツンと言っといてやれ。」

「ふっ、言われるまでもない。」

「それじゃ、今度こそ出発しますか。」

「そうだな。」

「おい、船をだせ。」

「本当に行くのか……」

「当たり前だ。早く出せ！」

「ひっ！？わっ分かりました……」

こうして俺とエルザは悪魔の島のガルナ島へと向かって行った。

海賊戦のち出航（後書き）

本日の一品（技）でございます。

原作名：ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ
能力名：艶美魔夜不眠　鬼斬り
種類　：剣術
使用者：ロロノア・ゾロ
能力内容：
　複数の敵をまとめて吹き飛ばす、鬼斬りの強化版。
　立ち上がる闘気により、まるで刀身が揺らめくように見える。

造形のち覚悟（前書き）

ども～！
今日はちょっと長めです。
いつもが短めってのは気づかないふりで。

造形のち覚悟

俺は今、エルザとは分かれてデリオラの封印解除の阻止へと向かっている。
本当は到着した、昨日のうちに目的地までいくつもりでジャングルを進んで行ったのだが、少々迷ってしまい予想以上に時間が掛ってしまった。
しかも、途中変なマスクをした奴らに襲われたのだ。
まぁ、襲われたと言っても雑魚しかいなかったから、簡単に倒したがな。
それで結局、途中で野宿をして、朝になってから再び歩を進めているのだ。
すると前の方で話し声が聞こえてきた。

「また会ったな、エルザ！」

「ん？ヴェルか。何故ここにいる？」

「えぇ～！なんでヴェルがいるの～？」

「いや、いろいろとあってな。変な奴等にも襲われたし。」

「そうか。そういば、お前の目的と現在の私たちの目的が一緒になった。」

「おい、エルザ。どう言う事だ？ヴェルと俺たちの目的が一緒って。」

「やっぱり、ここのS級クエストはデリオラが絡んでいたか……」
「！？何故ヴェルがデリオラのことを知っているんだ！」
「まぁ、いろいろとな。グレイもデリオラのことを知っているようだが……」
「ああ……デリオラは俺の故郷を壊滅させ、俺の師が命を賭して封印したんだ。」
「！？お前、やっぱりウルの弟子だったのか。どうりで魔法の雰囲気が似てるわけだ。」
「なっ！？ウルのことまで知っているのか。」
「ああ。と言うか、お前も弟子だったなら、俺はお前の兄弟子だ。」
「「「！？」」」
この事実には、流石にみんな驚いたようだ。
「と言っても、俺は半年もウルから習っていないがな。」
「でっでも、ヴェルって一回も氷の造形魔法使ったことないよね？」
と、ルーシィが疑問を投げてくる。
この疑問も当たり前だ。
ルーシィの言うとおり、俺は一回も氷の造形魔法は使っていない。
いや正確には……

「俺は、氷の造形魔法はできないんだ。」

「えっ？でも弟子だって？」

「造形魔法と言っても、いろんなものがあるんだ。ＦＴでもラキが木の造形魔法を使うだろ。」

「あぁ、そう言えば……」

「俺は氷とは限定せずに、造形魔法共通の部分を学んだんだ。それで後は独学で、あるものの、造形魔法を習得したんだ。」

「あるもの？」

「今は秘密で。」

「えぇ～」

「それより、グレイ。封印を解こうとしているのは、リオンか？」

「……ああ。やっぱり、リオンのことも知ってるのか。」

「まあな。」

「あっあれ？遺跡が傾いてる……」

「どーなってんだーーーー！！」

「ナツだな。どうやったか知らねえが、こんなでたらめするのあいつしかいねぇ。狙ったのか、偶然か……どちらにせよこれで、月の

光はデリオラに当たらねぇ」

「！？まて、誰かいる。」

エルザがそう言った瞬間、木々の間から多数のマスクを付けた奴らが現れた。

「見つけたぞ。妖精の尻尾（フェアリーテイル）」

「ゲッ……またこいつらかよ……」

「変なのがいっぱい来たーー！！」

「行け、ここは私に任せろ」

エルザがそう言う。

「ああ、頼んだぞエルザ。行くぞグレイ！俺たちでリオンを止めるぞ！！」

「リオンとの決着をつけて来い」

「ヴェル、エルザ……」

そして、俺とグレイは遺跡の方へと走って行った。

遺跡の中に入り、気配がする方へ行くと、氷で覆われている空間があった。

「ここだな。中からナツの気配もするしな。」

「ああ。ヴェル少し下がってくれ。俺がこの氷を壊す。」
そう言って、簡単に氷の壁を壊した。
そして俺たちは中へと入った。
そこには、ナツとリオンの二人がいた。
「やっぱりナツがいたか。」
「なんで、ヴェルがいるんだ！？」
「エルザも来てるぞ。」
「なにっ～！？」
若干ナツが青ざめている。
「誰かと思えば、落ちこぼれのヴェルデか。」
「ふっ、久しぶりだなリオン。」
「ヴェルが落ちこぼれ？」
「ヴェルも知り合いだったのか？」
「ああ、俺はリオンとグレイの兄弟子なんだ。」
「氷の造形魔法が結局できなかった落ちこぼれが、今更俺に何の用だ。」
「おい、てめぇ！ヴェルはめちゃくちゃ強えぞ！！」

「落ち着けナツ。確かに俺は氷の造形魔法は未だにできないんだ。」
「ふん、やはり落ちこ「まあ、他の造形魔法はできるがな。」……何？」
「俺は何も、ウルに何も教わっていなかった訳じゃないんだ。初めは俺も氷の造形魔法を習っていたが、どうやら才能がなかったみたいでな。とりあえず造形魔法の基礎だけを習ったんだ。」
そう、何故だか俺は氷の造形魔法が全くできなかったのだ。
だが、別の造形魔法ならできるかもしれないと思い、とりあえずウルに造形魔法の基礎を習っていた。
その後、旅をしながら自分ができる造形魔法を探していた。
そして、あるものの造形魔法ならできると言う事に気がついた。
それは……
「そしてその基礎を元にして、俺は炎の造形魔法を習得したんだ。」
「炎だと！？」
「炎……今まで聞いたことがないぞ。」
「炎に形を持たせるなど、無理だ！」
「それができるんだよ。」
俺も最初は無理だと思っていた。
じゃあ何故炎の造形魔法に挑戦したかというと、俺はある能力を使ってみたかったんだ。

ある能力とは、「烈火の炎」に出てくる八竜だ。
だが烈火の炎は少年サンデーのマンガだ。
つまり俺の能力の圏外なんだ。
でも砕羽（さいは）とか使ってみたいな～って思ってたんだ。
そしてよく考えたら炎の造形魔法で作れないかなってな。
そしたら、成功しちゃったんだよ。
そんで、俺はそれから炎の造形魔法の修行をしていったってわけさ。

「まあいい。所詮落ちこぼれの魔法だ。力を見てやろう。アイスメイク、大鷲（イーグル）」

そう言い、リオンは俺に向けて氷の大鷲数羽を放つ。

「ふっ、俺もバカにされたもんだな。火炎創造、壱式　崩（なだれ）」

俺は、大鷲の数と同じだけの火球を作り出しぶつけた。

「なかなかやるな。」

「そりゃ、どうも火炎創造、弐式　砕羽（さいは）」

右腕に炎の刃が現れ、そのまま俺はリオンの元へと突っ込む。

「アイスメイク、大猿（エイプ）」

俺とリオンの間に巨大な氷の大猿が現れた。
だが俺は、この大猿を砕羽で斬りつけ、真っ二つにした。

「何っ！？」

「火炎創造、参式　焔群（ほむら）」

大猿を斬られたことに驚き、隙ができたリオンを、俺は炎のムチで捕獲する。

「終わりだ。大人しくするんだ。」

「くそっ！？こんなもの！」

力を入れて外そうとするが、無理に外そうとすれば炎の温度が上がるようにしているため、そう簡単には外せない。

「くっ！」

「諦めろ。簡単には外せんぞ。」

「ヴェル、すげー！！おもしれぇ炎の使い方するなー！！」

「まあな。まだ奥の手もあるがな。」

ゴゴゴゴゴッ

リオンを捕えて、この後どうするかグレイに聞こうと思っていたら、遺跡が急に揺れた。

どうやら、傾いていた遺跡が元に戻ったようだ。

「どーなってんんだ。」

「これじゃあ、また月の光が……」

「お取り込み中、失礼。」

急に変な仮面を付けたやつが現れた。
ん？こいつ妙な気配がするな。
おそらく、変身魔法を使ってるな。

「ほっほっほっ。そろそろ夕日が出ますので、元に戻させてもらいました。それにしても零帝様、大丈夫ですか？」

「大丈夫に見えるか？それにしてもザルティ、お前だったのか。」

「ほっほっほっ。ほい。」

ザルティと呼ばれた奴が、リオンの方へ手をかざしたら、リオンを縛っていた炎が消えた。

「なっ！？」

「さて……月の雫（ムーンドリップ）の儀式を初めに行きますかな。」

「どうーやって、戻したんだー！！！」

そう言って、ザルティは出て行った。
そして、ナツはせっかく傾けた遺跡を元に戻されてキレて追いかけて行った。
あいつの妙な感じ……
ナツ1人じゃ危険かもしれんな。

「グレイ、リオンのことは任していいか？」

「ああ、俺がけじめをつける。」

「絶対氷結（アイスドシエル）は使うなよ……」

「！？気づいていたのか。だが、あいつとの決着は俺が付けないといけないんだ。死ぬ覚悟だって出来ている！！」

「死ぬ覚悟ねぇ……別にそれは悪くないと俺は思っている。俺も己の信念を通すためなら死ぬ覚悟がある。だが……お前のその覚悟はどこから来てる？」

「……」

「過去のウルを死なせてしまった、その後ろめたさからじゃないのか？それだったら、覚悟なんて格好のいいもんじゃねぇ。ただ、現実から逃げて死のうとしてるだけ。自殺みてぇなもんだ。」

「！？……そうかもしれないな。」

「本当にけじめをつけたきゃ、生きろ。その罪を背負い生き続けろ！！その罪が重いと感じた時は仲間を頼れ！エルザにルーシィ、ナツ、ＦＴのみんなに。そして俺にも。

「ありがとう、ヴェル。そうだな、せっかくウルに助けられたこの命。無駄にはできないか。俺は生き続ける！！」

「ふっ、いい顔になった。これなら、ここは本当に任してもだいじょうぶだな。」

「ああ。帰ったらたっぷりお礼をするぜ。」

「楽しみにしてる。じゃあ、俺はナツを追う」

そう言って俺はこの部屋を出て行った。
おそらく今のグレイは、リオンより強いだろ。
そして、これから加速的にグレイは強くなっていくだろう。
そんなことを思いながら俺は、ナツを探に行った。

造形のち覚悟（後書き）

ん～、裏技で烈火の炎の技出しちった（汗）
アイスメイクの部分を最初はフレアメイクとかにしようと思ったんだけど、烈火の炎の技って漢字だからおかしくね？って思ったんですよ。
そんで火炎創造とかめっちゃ適当に付けちまいました。
てか炎とかナツとかぶるじゃん！！
って訳であんまり使わない予定です。

追跡のち儀式再開（前書き）

今回は短めです。

追跡のち儀式再開

「とりあえず、燃えとけぇ！！」

ドゴォ！！

「ほっほー、愉快な売り言葉ですな。」

俺がナツを見つけたとら、丁度ナツがザルティに攻撃を仕掛けた所だった。

「ナツ、やっと追い付いた。」

「おー、ヴェルも来たのか。」

「ほっほっほっ。もう一人増えましたか。しかし何故、ここがお分かりに？」

「俺は鼻がいいんだ。ちなみにお前は、女の香水の匂いだ。」

「俺はナツの気配を追ってきただけだ。それにしても香水の臭いか……やっぱり、変装してたか。お前の本当の目的は何だ！」

「ほっほっほっ、私はどうしてもデリオラを、復活させねばならないのですよ。」

「それは、リオンの目的のためか？それとも……」

「ほっほっほ、どうでしょうかねぇ。」

「まあどっちでもいいが、やめとけ。どうせ無理だ。」

「そうだ！！やめとけ、やめとけ。グレイがヴェルの代わりにあいつをぶっ倒す。そして俺がお前をぶっ倒す！１００万回な。」

「そうだな。それで終わりだ。」

「そうでしょうかねぇ？」

そういいザルティが、デリオラの方を見た。
するとそこには、光が降り注いでいた。

「「！？」」

「光が！！」

「誰かが上で、儀式をしているのか！！」

「たった一人では、月の雫（ムーンドリップ）の効果は弱いのですが、実は既に十分な量の月の光は集まっています。後はきっかけさえ与えてしまえば……ほら」

その瞬間デリオラの氷が、凄い勢いで溶けだした。

「ちっ、まずいな。ナツ、あいつは任せていいか？俺は儀式を止めに行く。」

「ああ、任せろ。」

「気をつけろよ。あいつ、少々厄介だぞ。」

「俺は負けねよ！」

「ふっ、そうだな。」

そして、俺は上へ向かおうとし、ナツが俺を行かせるために俺の前へ出た。

だが……

「させませぬぞ！」

ザルティがそう言うと、ナツの足元が崩れ、ナツがバランスを崩し倒れた。

「ナツ、大丈夫か！」

ザルティは俺にも、水晶玉を投げつけてきた。

「ちっ、そんな攻撃当たるかよ！……！？ガハッ！！」

ドゴン！！！

初めこそ大したスピードではなかったが、急に速度が上がり俺は、避けきれずに攻撃を受けた。

そしてその衝撃で、後ろの岩へと吹き飛ばされてしまった。

「ほっほっほっ。当たりましたなぁ」

「ヴェル大丈夫か！？」
「いい具合に当たりましたから、しばらくは動けますまい。」
「痛っ。おいおい、勝手に人のことを戦闘不能扱いにするなよ。」
「！？」
「ヴェル！無事だったか。」
「ああ、なんとかな。」
「どう言う事ですかな？確かに良い一撃がはいったのですがな……」
「確かに、何もせずに受けてたらやばかったかもな。」
「やはり何かしたのですか。」
「ああ。ちょいっと、体を鉄の硬度にして、防御力をあげた。」
「そんなことが……」
俺が使ったのは、鉄塊（テッカイ）だ。
それにしても……
「それにしても、お前の攻撃はなんちゅう威力だよ。若干ダメージを食らったぞ。それにスピードも異常だ。」
「お褒めに頂きありがとうございます。しかし、あなた方二人は、上へは行かせませぬぞ。」

「ん～、まいったなぁ。ん？これは……」

どうするか迷っていたら、丁度上の階にエルザとルーシィの魔力を感じた。

あいつらに頼むか。

そう思い俺はエルザに念話で、儀式を止めるように頼んだ。

「よし。じゃあ、お前を倒してから行くか。」

「ほっほっほ。簡単には倒れませんぞ。」

「いいのか、ヴェル？早くしねぇと封印とけるぞ。」

「ふっ、既に手は打った。」

「そうなのか？」

「ああ。行くぞ、ナツ！」

「おお。」

そうして俺とナツは、ザルティへと向かって行った。

追跡のち儀式再開（後書き）

本当に短くてすんません。

ザルティのちデリオラ（前書き）

毎度ながら遅くなりました。
そして今回も短いです。
ザルティ戦でとりあえず区切っちゃいます。

ザルティのちデリオラ

「ナツ、一気に行くぞ。」

「おう！」

「ほっほ。こちらもそうさせてもらいますぞ。」

「上等！！」

すると、ザルティがまた水晶玉を2つ操り、ナツと俺にそれぞれ攻撃を仕掛けた。

「そう何度も、くらうかよ！」

「こんなもん、壊してやらー！」

俺とナツは向かってきた水晶玉を、殴り壊した。
しかし水晶玉はすぐさま元の形へと戻った。

「また直った！？」

「これは……お前、失われた魔法（ロストマジック）を使えるのか。」

「ほっほっほ、いかにも。私は物体の”時”を操れます。すなわち水晶を壊れる前の時間に戻したのです。これが時のアークです。」

「やはりそうか。ちっ、厄介だな。」

この後、俺とナツは防戦一方となってしまった。
「くそっ、めんどくせー！！けどあの魔法人間には効かないみたいだな。」
「ああ、どうやらそうみたいだな。」
「おやおや、いい所に目を付ける。正確には生物には効きません。だからこそ、ウルであるこの氷の時間も元には戻せません。」
ザルティは落ち着いてそう言う。
一方俺たちは、若干焦っている。
それは、月の雫（ムーンドリップ）が止まらないからだ。
「エルザたちはどうしたんだ……」
すると、その時……
「オオオオオオオオオオオオ！！！」
「「「！？」」」
「来たぁ！！」
「くそっ！！間にあわなかったか……」
「なんだー！？うるせーー！」
まだ完全ではないが、デリオラの氷が溶けていた。

「ナツ、早くこいつを倒して、デリオラをどうにかするぞ！」
「おう！」
「ほっほっほ。やってみなされ。天井よ時を加速し、朽ちよ。」
そう言いザルティは、天井を破壊して、その瓦礫を操って攻撃しようとする。
そしてナツがザルティへ突っ込む。
「その荒ぶる炎は、時のアークを捕えられますかな。」
「うるせぇ！さっさとくたばっとけ！！」
ザルティが無数の瓦礫で一斉にナツへと攻撃した。
しかし、ナツはその無数の瓦礫を広範囲の炎で焼き尽くした。
「ぬうぅ！！いない！？」
ナツが、先ほどの砂埃にまぎれ姿を消す。
ザルティはナツを探すために左右を見渡す。
「ナツにばっかり気を取られるなよ。」
「！？これは……動かん」
「ふっ、影真似の術、成功。そうそう、俺たちも時を操れるんだ。なあ、ナツ」

「！？」

「ああ、未来だ！１秒後にお前をぶっ飛ばす！！火竜の鉄拳！！！」

「きゃあああわあああ」

やっと片付いたか。
てかあいつ、「きゃああ」っていったぞ。
女だったのか？
まあいいか。

「おつかれさん、ナツ。次はこいつをどうにかしよう。」

「ああ、ぶっ倒す。」

「いやいやいや。お前にはまだ無理だから。」

「なんだと～！！」

「まあ落ち着け。月の雫（ムーンドリップ）は止まっているが、どうやらエルザたちは間に合わなかったみたいだな。」

そう、月の雫（ムーンドリップ）は止まっているものの、既に氷がほとんど溶けてしまっている。
そしてついに……

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

完全に氷が溶けてしまった。

ザルティのちデリオラ（後書き）

相変わらず短いな～（汗）
次回行こう頑張ります。
（また短くなりそうだけど……）

復活のち崩壊（前書き）

久しぶりの更新になってしまいすいません。
最近忙しすぎてなかなか書けないです。
今後もチョイっと間があくかもです・・・

復活のち崩壊

「ウル……」

「グレイいたのか！」

「ナツ」

「こうなったら、やるしかねェ！あいつぶっ倒すぞ！！」

ガツンッ

「痛っ！？」

「だから、まだお前の力じゃ無理だっていいたろ。」

「ヴェルもいたのか。」

「じゃあどうすんだよ！！俺は諦めねぇぞ。」

俺に叩かれた頭を押さえながら言ってくる。

「俺も諦めてはいない。」

でもどうしたものか。

多分まだ、全快って訳じゃないと思うが、流石にデリオラを相手にするのは辛いぞ……

「ククク。お前等には……無理だ。はぁーはぁー。ウルを超えるために……俺が……ははは！」

「リオン！？」

「おめーの方が無理だよ！ひっこんでろ。」

うん、確かにあの怪我じゃ無理だな。
ていうか全力でもまだ、リオンの実力じゃ勝てないだろう。

「やっと会えたな、デリオラ……。あのウルが……唯一勝てなかった怪物。今俺が…この手で倒す」

そう言いながらリオンが無理して起き上がる。

「俺は今……あんたを超える。」

ビシッ

「！！！」

リオンが立ちあがったとき、俺はリオンの後頭部を手とうで一撃を入れて行動不能にした。

「もういいよ、リオン。後は俺たちに任せろ。」

「ヴェル、俺は何と言われようとあいつと戦うぞ！！」

「はぁ～。分かったよ。俺とグレイが援護はしてやる。」

「よっしゃー！！」

「ナツ、あんま調子のってるとやられるぞ。」

「いくぞー！！」

そう言いナツがデリオラの前へ立つ。
するとデリオラが腕を振り上げ叩きつけようとしてきた。
ん？ナツのやつ避ける気配がない……

「バッバカ！！ナツ、真正面から受けるな、よけろぉぉ！！」

しかし、デリオラの腕が振り下ろされることはなかった。
何故か動きが止まっているのだ。
そしてその瞬間、腕が砕け散ったのだ。

「え！？」

そして、体全体にひびが入っていく。

「何だー？？」

「バ……バカな。そんなまさか……」

そしてついには、デリオラは崩壊してしまった。

「デリオラは、すでに死んでいたのか……。１０年間ウルの氷の中で命を徐々に奪われ、俺たちはその最後の瞬間を見ていると言うのか。かなわん、俺にはウルを超えられない」

「すっすげーなぁ。お前等の師匠って！！」

ナツがバカみたいに驚いているな。
まあ確かにウルはすげぇよな。

「ありがとうございます。師匠……」

グレイは昔のことを思い出したのだろう。
泣きながらウルに感謝している。

破壊のち悪魔の輝き（前書き）

遅くなりすぎました・・・
最近妙に忙しすぎます。
また間があくかもです＞＜

破壊のち悪魔の輝き

「いやー終わった、終わったー！」

「あいさー」

デリオラが崩壊してから、とりあえず全員集合した。

「本当、一時はどうなるかと思ったよ。すごいよね、ウルさんって。」

「これで俺たちもS級クエスト達成だー！！」

「やったー！」

「もしかして私たち、”2階”に行けるのかな??」

「はは」

えっ?こいつらはおバカさんでしょうか??

黙って来てるのに褒められるとでも……

しかもまだ達成してないし。

あっエルザが恐い（汗）

そんなエルザに気付いたのかみんなが大量の冷や汗を流している。

「そうだったー。お仕置きが待ってたんだ！！」

「その前にやることがあるだろ。」

「「「「？？」」」」

「今回の依頼は、悪魔にされた村人たちを救う事だろ？」

「ヴェルの言うとおりだ。Ｓ級クエストはまだ終わっていない。」

「だってデリオラは死んじゃったし、村の呪いだってこれで……」

「いや、あの呪いとか言う現象はデリオラの影響ではない。」

「そうだな。俺は呪いの現象ってのを見てないから何とも言えんが、おそらく月の雫（ムーンドリップ）の膨大な魔力が影響している可能性が高い。」

「ああ、だからデリオラが崩壊したからといって、事態が改善する訳ではない。」

「そんな～」

「んじゃあ、とっとと治してやっか～！！」

「あいさー！」

「どうやってだよ……あっ」

グレイが何かを思いつたかのようにリオンを見る。

だが……

「俺は知らんぞ。」

「なんだとぉ！」

「とぉ！」

「だってあんたたちが知らなかったら、他にどうやって呪いを」

「3年前島に来た時村が存在するのは知っていた。しかし、俺たちは村の人々には干渉しなかった。奴等から一度も会いに来ることもなかったしな。」

「3年間一度もか？」

「それはおかしな話だな。遺跡からは毎晩のように月の雫（ムーンドリップ）の光がおりてたはずなのに、何故ここを一度も調査しなかったんだ？」

「月の雫（ムーンドリップ）の人体への影響についても多少疑問が残る。」

「何だよ…今更「俺たちのせいじゃねぇ」とでも言うつもりかよ。」

「3年間俺たちも同じ光を浴びていたんだぞ。」

確かにそうだ。
もし月の雫（ムーンドリップ）の影響で村人たちがあの姿になったのなら、リオンたちも人体に影響が出ているはずだ。
しかし、リオンたちにおかしな所はない。
この後リオンが村人たちが何か隠してる可能性があるから注意するように言ってきた。
そしてその忠告を聞き俺らは村へと戻って行った。

俺たちは今村の中でエルザの話を聞いていた。
ナツ曰く村はなくなってしまったらしいのだが、何故か元通りになっていたらしい。
エルザは何故一番怪しいであろう遺跡を調べなかったのかを聞いた。
村人は最初は何かを隠すような解答だったが、なんとか本当のことを話してくれた。
なんでも何度も調査にはいったらしい。
しかし何故か気付いたらいつも村の門にいて遺跡には全く近づけなかったらしい。

だがこれで俺はこの謎に確信を持てた。

「やはりか……」

どうやらエルザも気付いたらしい。
他の奴らは全く気付いていないみたいだがな。

「原因は分かったけど、どうやって村人を元に戻すんだ？」

俺がエルザにそう問うと、

「それは任せろ。ナツ、私についてこい！！」

「ねぇヴェル、どう言う事？」

「まァ簡単に言うと今から月を破壊しますよってことだ。」

「おおおっ！！」

「「はぁああ！？」」

ルーシィとグレイは当然のごとく驚き、ナツは何故か喜びながらエルザについて行った。
そしてエルザはこれからすることをナツに伝えているようだ。

「何であんなに乗り気なんだよ・・・」

「まさか、本当に月を壊したりしないでしょうね・・・」

「まぁ見てろって。」

そして俺たちや村人がエルザたちがいる高台に注目する。
エルザは今、投擲力をＵＰする巨人の鎧に換装し、闇を退ける破邪の槍を持っている。

「いくぞ」

そう言い投擲モーションに入る。

「ナツ！！！」

「おぉう！！」

そして投擲するタイミングでナツが、槍の後ろにある石突を炎を纏った拳で思いっきり殴る。

「そおらぁ！！」

「届けぇぇぇぇ！！！」

エルザの投擲力とナツの火力が合わさった槍は勢いよく月へと向かって行く。
どんどん近づいていく。
まだまだ上昇する。
そして遂に、槍が何かにぶつかる。
それと同時に何と月に罅がいる。

「おおおおおおおっ」

「「うそだぁぁぁ！？？」」

村人たちは大歓声を、ルーシィとグレイは悲鳴に近い叫び声をあげている。
そして遂に月が割れる……
いや、正確には空を覆っていたものが割れたのだ。
そのため月は健在だ。
ただし、どこででも見られる美しい月だ。

「え！？」

「これは……」

「割れたのは月じゃない……空？が割れた？どう言う事？？？」

その疑問にエルザが答えている。
実はこの島月の雫（ムーンドリップ）の影響で、邪気の膜で覆われていたのだ。
そして今、その膜を壊したという訳だ。
膜を壊したことにより周りが光っていた。

これで村人も元通りだな。
「けど・・元に戻らねぇのか……？」
「そんな……」
「いや、元に戻っているぞ。」
「「「？」」」
「さっきエルザが壊した膜は彼らの姿でなく、記憶に影響していたんだ。」
「記憶？」
「そっ。元々彼らは、悪魔なんだよ。」
「えぇぇぇぇ！！」
「マジ……？」
「うっうむ。まだ混乱しているが……」
このあとエルザがもう少し詳しく説明していた。
そして、何でも村長息子だというボボが戻ってきた。
何でも自分たちを人間だと思っている村人たちが恐くなって避難していたらしい。
この日の夜は悪魔の宴という凄い響きの宴で一晩中盛り上がった。

ここの村人たちを見ていると、確かに見た目は悪魔みたいだが心は天使みたいだった。

帰省のち戦争（前書き）

今月は忙しくない予定だったのに・・・
なにがどうしてこうも忙しくなった！！
と言う事で続きをどうぞ。

帰省のち戦争

「帰ってきたぞー！」

「来たぞー！」

俺たちは今マグノリアの街に戻ってきた。
ガルナ島でのことは、ギルドで正式に受理された依頼ではないということで報酬は受け取らなかった。
しかし、村の悪魔たちがせめて友人として何か贈り物をしたいというので、追加報酬の鍵だけもらう事となった。
つまり、ルーシィだけ得したことになるのだ。

「俺は疲れたから、このまま帰るよ。」

「マスターへの報告はどうするんだ、ヴェル？」

「明日の朝一でギルドに行ってするよ。」

「そうか、わかった。でわまた明日。」

「ああ」

そして俺はエルザたちと分かれて家へと向かった。
ちなみにナツたちは報酬の鍵について話していた。

それにしても流石に疲れたなぁ。
今日はゆっくり休むか。

そう思い俺は家に着いたら、風呂に入りご飯を食べた後、まだ寝るには早いため本を読んでいた。
しばらくしたら玄関を叩く音が聞こえた。
「だれだろ？……どちら様～？」
「ヴェル、俺だ、俺！」
「オレオレ詐欺なら間に合っています。」
「違うわ！グレイだよ。」
「ああ、グレイか。なんか用か？」
そう言いながら玄関を開ける。
そこには上半身裸のグレイがいた。
「ちょっとな。実は……」
「その前に一言。そんな格好で来るな、この変態めが！」
「誰が、変態だ！ってうわっ、いつの間に服を！？まぁいいや。そんなことより大変なんだ。実はギルドが襲撃を受けた……」
「……ハァ！？どう言うことだ？いつ？けが人は？誰が？」
「ま、まぁ落ち着け。何でも誰もいない夜中に襲撃されたらしい。だからけが人もなしだ。」
「そうか、よかった。……で、誰がやったんだ。」

「ファントムっつうギルドのやつらしい」
「ファントムか。マスターはどうするって？」
「放っておけってさ……」
「そうか。」
「それでだ、ファントムの奴らに住所を調べらてるかもしれないから、みんなでいた方がいいってエルザが。」
「なるほど、確かに一人でいるよりは安全だな。」
「ああ、だからルーシィの家にいつものメンバーで集まることになった。だからヴェルも呼びに来たんだ。」
「了解した。準備したら過ぎに行く。」
「じゃあまってるぞー」

そう言ってグレイは行った。
それにしてもギルド襲撃か……
そういばそんなのも原作にあったような。
ダメだ、原作知識が完全に分からなくなっているな。
ん～、ギルド襲撃だで終わればいいんだが。
とりあえず、ルーシィの所に行くか。
そう思い、俺は簡単に荷物をまとめて家を出た。
そしてルーシィの家の近くまでいったら、見知った人物がいた。

「ん？おーい、ルーシィー！」

「あっ、ヴェル！話聞いた？」

「ああ、大変なことになったらしいな。」

「うん。お仕置きをまぬがれたのは良いけどね。ファントムって言えば昔からフェアリーテイルと仲が悪いって有名だもんね。」

「そうだな。あっちのギルドもぶっ飛んだギルドらしいしな。まぁあんまし良い噂は聞かんが。」

「そーなんだよねぇ。私フェアリーテイルに入って正解だったよ！！そう言えばヴェルはどこに行くつもりなの？結局私の家まで来たけど？」

「ん？どこって……。もしかして聞いてないのか？」

「へ？何を？」

あいつら言ってないのかよ。
まあ、そのほうがらしいけどな。

「まぁ多分家に入れば分かるよ。」

多分いると思うし……

「？私の家に何か……」

俺に問いかけながら、ルーシィが家の扉を開けるとそこには――

「おかえり」

「おかー」

「良い部屋だな」

「よォ」

「あるのーーーーー！？」

上から、グレイ・ハッピー・エルザ・ナツ・ルーシィだ。
ルーシィが驚くのは分かる。
だが、他のやつは何堂々と不法侵入してんだよ。

「おまえらなぁ……」

「ヴェルもいらっしゃーい」

「ここ私の家なんだけど。」

そそいてこの後、ルーシィの家を荒ら・・エンジョイしたり、聖十大魔道のはしやファントムの話をして過ごした。
そして翌朝事件が起こった。

なんだか外がざわざわしていたため皆で外の様子を見に行った。
大樹の周りに人垣ができており、樹の近くまで行くとよく知った顔が見えた。
しかし、その知った顔は大怪我をした状態で樹に磔にされていた……

「レビィ、ジェット、ドロイ……」

「レビィちゃん！？ひどい……」

そうギルド内チーム、シャドウ・ギアの3人だった。
そして身体にはファントムのマークが刻み込まれていた。
俺らはこの衝撃を隠すことができなかった。
そして背後からとてつもない怒気を感じた。
振り返ってみるとマスターがいた。

「ボロ酒場までなら我慢できたんじゃがな……ガキの血を見て黙ってる親はいねぇんだよ……」

そして、マスターは怒りで手に持っていた杖をへし折りながらこう宣言した。

「戦争じゃ！！！」

治療のち真の狙い（前書き）

3連休ゆっくり休めました。
久しぶりです。

そして女子サッカー優勝しましたね。
すごい！！
感動ですよ。

治療のち真の狙い

マスターの戦争宣言の後皆はファントムに乗り込みにいった。
俺はあの後すぐに、レビィたちを樹から降ろした。
俺も最初は一緒に行くつもりだったが、レビィたちの怪我か相当ひどかったため俺は治療を行う事にしたのだ。

「ひどい、どうしてこんなことができるの……」

「ルーシィ3人を運ぶのを手伝ってくれ。今から治療する。」

「うん。そういえばあの仙豆っていう不思議な豆はもうないの？」

「ああ。あと一粒しか無くてな。あれを作るには相当な魔力が必要で、後2つ作るのは無理なんだ……」

「そうなんだ……」

「だが安心しろ。別の方法で3人をいっぺんに治してやるから。」

「えっ！？そんなことできるの。」

「任せとけ！とりあえず3人を近くに並ばせてくれ」

「うん、わかった。」

今の会話通り仙豆のストックが後1つしかないのだ。
仙豆を出すのには未だにこの状態での、半分以上の魔力を必要とする。

つまり残り必要な2つは今日中には出せないのだ。
だからこれから別方法を取る。
これも魔力は結構消費するが、まとめて治療できる。

「ヴェル、こんな感じでいい？」

「ああ。それじゃあ始めるか。ルーシィ少し下がっててくれ。」

「うん、お願いね。」

「双天帰盾（そうてんきしゅん）。　俺は拒絶する」

その瞬間、3人が優しい光に包まれる。
そして少しずつだが、傷が癒えていく。
これはＢＬＥＡＣＨの井上織姫が使う治療・復元術で、“盾の内”の事象を拒絶するものである。
つまり、事象（出来事）を拒絶することでそれが起きた前の状態に戻すことができる。

「すごい、どんどん治って行く。」

そして数分後に治療は終了した。

「ふう、これで完了っと。」

「すごーい。もう完治したの！」

「ああ。だが魔力がまだ戻ってないし、精神的に疲れてるだろうから病院に運んで今日一日くら安静にしてもらおうか。」

「うん、そうだね。」
そう言って俺たちは、街の病院まで3人を連れて行った。
そして病室で3人が目がさめるまで看病することにした。
「ヴェル、少し外の空気吸ってくるね。」
「ああ、だがあまり一人になるような所には行くなよ。」
「うん」
そう言ってルーシィは病室を出て行った。

―ｓｉｄｅルーシィ―

はぁ、みんな私たちを置いて行っちゃうんだもんな。
それにしても今回もヴェルの不思議な魔法で助けられたな。
レビィちゃんたちの怪我相当ひどかったのに、１０分くらいで治しちゃうんだもん。
本当にすごいや。
私はそんなことを考えながら歩いていると、いつの間にか人通りの少ない通りを歩いてしまっていた。
そのときポツポツと雨が降ってきた。
「やだ、天気雨？」

そして私の前からやってくる人影に気づいた。

「しんしん・・と。そう……ジュビアは雨女。しんしんと……」

「はぁ？」

「あの……誰ですか？」

「楽しかったわ、ごきげんよう。しんしんと……」

「え！？何なの！？？」

本当に何なの？？

この街でこんな女の人見たことないわよ。

「ノンノンノン、ノンノンノン、ノンノンノンノンノンノンノン。3・3・7のNO（ノン）でボンジュール」

「また変なの出たっ！？」

本当に次から次に……

「ジュビア様だめですなぁ、仕事放棄は。」

「ムッシュ・ソル」

「私のメガネがささやいておりますぞ。そのお嬢さん（マドモアゼル）が愛しの標的だとね。」

「あら、この子だったの？」

「え？」

どういうこと、私が標的って……

「申し遅れました。私の名はソル。ムッシュ・ソルとお呼びください。」

「偉大なる幽鬼の支配者（ファントムロード）より、お迎えにあがりました。」

「ジュビアはエレメント４の一人にして雨女。」

「ファントム！？あんたたちが、レビィちゃんを！！」

「ノンノンノン、３つのＮＯ（ノン）で誤解を解きたい。ギルドを壊したのもレビィ様を襲ったのも全てガジル様。」

そして急に私を包むように水が現れた。

「まぁギルドの総意に変わりはないのですがね。」

何、この水！！

息ができない。

「ぷはっ！な・・何これ！？」

なんとか水の外に顔を出せたがすぐに中に戻された。

「ジュビアの水流拘束（ウォーターロック）は決して破られない。」

悔しい！
こんな奴らにやられるなんて。
誰か助けて！？
お願い。
ヴェル……

―パシュンッ―

そんな音とともに私の周りの水が消えた。

「大丈夫かルーシィ！」

「ヴェル……。うん、あり・・がとう」

「ああ、後は任せて少しそこで休んでろ」

ああ、ヴェルはやっぱり頼りになってカッコいいな。
また助けられちゃった。

―ｓｉｄｅヴェル―

「ああ、後は任せて少しそこで休んでろ」

俺はそう言いルーシィに背を向けた。
何故俺がここに来たかと言うと、ルーシィが部屋を出てしばらくしたら、この街では初めて感じる結構大きめの魔力が２つ出現し、その魔力の持ち主がルーシィに接触しているのを感じたためルーシィ

の元へ瞬間移動で行ってみた。
すると、ルーシィが水の塊に捕えられていたのだ。
その後は魔法で操られているであろう水の塊に完全魔法無効化能力をＯＮにした状態で触り、ただの水にしたのだ。

「さて、てめぇら。覚悟は良いな。」

「ジュビアの水流拘束（ウォーターロック）は決して破られないと思っていたのに……。」

「あなた様は、ヴェルデ様。あなたも他の方たちとでかけられていると思いましたが。」

「俺は今相当頭にきてんだ。無事に帰れると思うなよ。嵐脚（ランキャク）！！」

「「！？」」

２人はいきなりの攻撃に驚いていたが、男はひらりとかわし、女には直撃したが水になり効果はないようだ。

「ジュビアの身体は水でできているの。しんしんと……」

「いきなり攻撃とは。気が早いですな、ヴェルデ様は。」

「ふーん少しはやるようだな。」

それにしても身体が水で出来てる女は厄介だな。
それじゃあまるで、自然系（ロギア）能力者じゃないか。
ん？でも武装色の覇気を纏えば攻撃できるんじゃ？

よしやってみっか。

「女、水だからって気を抜くとやられるぞ。」

「あなたには、無理。ジュビアには勝てない。」

「だから油断するなっていったろっ！？」

そう言いながら俺は剃（ソル）で一気に近づき、武装色の覇気を纏ったただの右拳をお腹に打ち込む。

そして、確かな手ごたえ。

水を殴ったのではなく、人を殴った手ごたえがあった。

そしてジュビアは飛ばされ、近くの壁に激突していた。

「がはっ！？ゴホッゴホッ。ど・・どういうこと。ジュビアの身体は水なのに……」

「俺に攻撃できないものはないんだよ。」

「砂の舞（サーブルダンス）」

男の声が聞こえた途端、周りに砂が舞って視界が奪われた。

「噂通り規格外のお方ですね、ヴェルデ様は。今回は引かせていただきます。」

「待てっ！確かに仲が悪いが何故ＦＴを狙うんだ！！」

「ノンノンノン、３つのＮＯ（ノン）で誤解を解きたい。私たちの狙いはルーシィ・ハートフィリア様ですよ。」

「!?どう言う事だ。」

「おや、知らなかったのですか?まあいいでしょう。ちなみに依頼主はルーシィ様のお父様ですよ。

「「!?」」

「では、またお会いしましょう。」

「!?まてっ!」

くそっ、逃げられたか……

「ルーシィ、大丈夫か?」

「うん……。ヴェルごめんね。ギルドやレビィちゃんがあんなことになったのは多分私のせいなんだ……」

「誰のせいでもねぇよ。とりあえずギルドに戻ろう。」

「う・・ん。」

とりあえず、ルーシィを守れた。
あとは皆が無事に帰ってきてくれたらいいんだが。

だがギルドに戻ったらその期待はむなしく裏切られ、マスターがやられて撤退したという情報がもたらされた……。

治療のち真の狙い（後書き）

感想をくれた方々ありがとうございます。
これからも応援よろしくです！！

そして久しぶりの技紹介でございますよ～。

原作名：ＢＬＥＡＣＨ
能力名：双天帰盾（そうてんきしゅん）
種類　：治癒・復元術
使用者：井上織姫
能力内容：
“盾の内”の事象を拒絶。
六花の二人の間に対象を囲う盾を張り、盾の内側を事象（出来事）が起こる前までの状態に戻す。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5454r/

嵐吹き荒れるのかもしれない物語

2011年7月18日16時10分発行